水源地域活性化のヒント

―水源地域支援ネットワークのこれまでの取組と、地域の取組事例集―

国土交通省　水管理・国土保全局
水資源部　水資源政策課

目次

はじめに **01**

水源地域振興の歴史とネットワーク会議のこれまでの取組み **02**

水源地域支援ネットワーク会議　開催実績 **03**

水源地域支援ネットワーク会議　開催概要 **04**

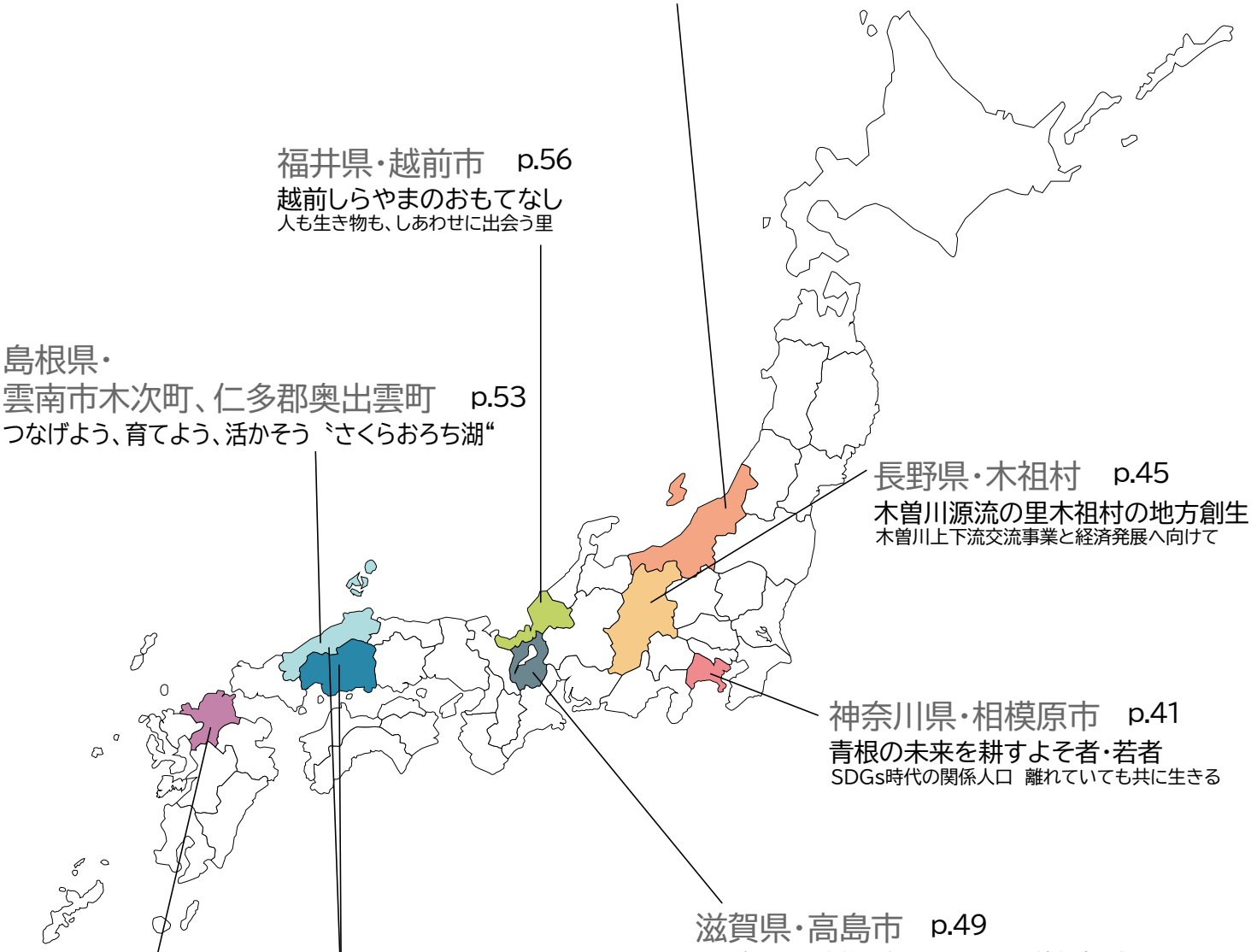
平成 25 年度第 1 回（福岡県東峰村（とうほうむら）） 04
平成 25 年度第 2 回（東京） 07
平成 26 年度第 1 回（島根県雲南市、奥出雲町） 10
平成 26 年度第 2 回（東京） 13
平成 27 年度第 1 回（福井県越前市） 16
平成 27 年度第 2 回（東京） 19
平成 28 年度第 1 回（岩手県奥州市胆沢（いさわ）区） 22
平成 29 年度第 1 回（滋賀県高島市） 26
平成 29 年度第 2 回（東京） 29
平成 30 年度第 1 回（長野県木祖村、愛知県名古屋市） 32
平成 30 年度第 2 回（東京） 35
令和元年度第 1 回（奈良県川上村） 38

事例紹介 **41**

活動事例①　神奈川県相模原市 41
活動事例②　長野県木祖村 45
活動事例③　滋賀県高島市 49
活動事例④　島根県雲南市 53
活動事例⑤　福井県越前市 56
活動事例⑥　福岡県東峰村 59
活動事例⑦　広島県、島根県、主に江の川流域 9 市町村 62
活動事例⑧　新潟県糸魚川市 65

有識者による対談 **69**

活動事例紹介団体の所在地



新潟県・糸魚川市　p.65
人と自然の関わり・自然力との共存共栄

福井県・越前市　p.56
越前しらやまのおもてなし
人も生き物も、しあわせに出会う里

島根県・
雲南市木次町、仁多郡奥出雲町　p.53
つなげよう、育てよう、活かそう〝さくらおろち湖〟

長野県・木祖村　p.45
木曽川源流の里木祖村の地方創生
木曽川上下流交流事業と経済発展へ向けて

神奈川県・相模原市　p.41
青根の未来を耕すよそ者・若者
SDGs時代の関係人口　離れていても共に生きる

滋賀県・高島市　p.49
琵琶湖里山の自然や資源を大切に、環境保全に努めましょう
あるもの探しで、自然・歴史・生活文化を5感で楽しみましょう

広島県、島根県・
主に江の川流域9市町村　p.62
ここで暮らしつづけたいの思いをつなぐ
持続可能な暮らしのために、地域の仕組みをつくる

福岡県・東峰村（とうほうむら）　p.59
東峰村の観光情報サイト「東峰見聞録」の運営と観光案内
村の魅力を伝えるオーダーメイド観光の挑戦！

はじめに

水源地域は水源を支える里として、また、日本の原風景や伝統文化を遺す地域として、維持・保全していくことが不可欠です。しかし、現在、高齢化が進む中で、集落、地域社会の疲弊が進んでいる地域が多く、早急な対策が必要となっています。そのような状況の中、全国の水源地域で、住民や団体が地域活性化に向けた様々な取組みが進められています。しかし、これらの取組みを進める中で各地の団体が、直面している課題や解決に向けた情報を共有する機会は少ない状況でした。

そこで平成23年度から、これらの人々が地域や分野を超えて連携し、様々な知見や情報(マーケティング、ブランド化手法、情報の発信方法等)を共有し、問題解決や新たな取組みに繋げていくとともに、互いに切磋琢磨できる関係を拡げるためのネットワークづくりを「水源地域支援ネットワーク」として支援しております。年に約2回、水源地域支援ネットワーク会議を開催してきて、8年間の蓄積は水源地域振興に関する多くの示唆に富むものとなっております。

今後、各地域でのさらなる水源地域振興のため、これまでの蓄積を広く全国に普及し、各地域でより良い取組みを展開する一助としていただくために、これまでの水源地域支援ネットワーク会議開催の成果や関係団体の水源地域振興事例を事例集として取りまとめました。

イメージ写真

水源地域振興の歴史と水源地域支援ネットワークのこれまでの取組み

水源地域対策は、水資源開発のために行うダム・堰等の構造物の設置により生じる水没地域への特別の対策として、①ダム事業者による補償、②水源地域対策特別措置法（以下、「水特法」）に基づく措置、③水源地域対策基金による生活再建対策等、④水源地域活性化のためのソフト施策の4つの柱があり、相互に補完し合い、総合的な対策を講じてきました。

戦後の高度経済成長に伴う慢性的な水不足及び各地で発生していた水害に対処するため、ダム建設等が積極的に取り組まれるようになりました。一方、ダム建設のために不利益を被る水没地域の同意を得ることが困難な状況にあったことから、補償制度が整えられました。

水没地域の住民にとってダム建設は、移転後の新生活への不安に加え、下流地域住民のみが受益することへの犠牲的な感情、不公平感も高まっていました。そこで、ダム等の建設により著しい影響を受ける水源地域の影響緩和や活性化を図るための各種措置として、水源地域対策特別措置法が制定され、同法に基づき指定されたダム等については、水没関係住民の生活再建のために必要な施設整備を促進するための水源地域整備計画を都道府県が策定すること等が規定されました。

一方で、水源地域と受益地域が複数都府県に跨がる場合等、水源地域を抱える地方公共団体のみの対応では困難なものもあったため、双方の地域の地方公共団体等の合意のもと、便益を受ける下流の地方公共団体等からの負担金を基に、水特法を補完する生活再建・地域振興対策等をとして、各地域で水源地域対策基金が設立されました。

さらに、水源地域住民と下流受益住民の相互理解を推進するため、水源地域活性化のためのソフト施策も講じてきました。具体的には、平成4年度にダムを地域に一層開放することを目的とした「地域に開かれたダム」制度創設、平成13年度から水源地域と流域の地方公共団体や住民、関係行政機関が連携し、適切なダム管理及びダムを生かした水源地域活性化を目的とした「ダム水源地域ビジョン」の実施、平成22年度から水源地域の住民、企業等が行う着地型観光プログラムの開発等を応援する「水の里応援プロジェクト」の実施、平成23年度から水源地域活性化に関わる人々の連携や人材育成を支援する水源地域支援ネットワークの構築等の施策を行ってきました。

水源地域支援ネットワークでは、水源地域で活動する人々が地域や分野を超えて連携し、様々な知見や情報（マーケティング、ブランド化手法、情報の発信方法等）を共有し、問題解決や新たな取組みに繋げていくとともに、互いに切磋琢磨できる関係を拡げるため、年に約2回、水源地域支援ネットワーク会議を開催してきました。

水源地域支援ネットワーク会議　開催実績

全国の水源地域では、住民や各種団体が地域活性化に向けた様々な取組みを行っています。

水源地域支援ネットワークは、水源地域の活性化に取り組む団体、有識者、行政等が、顔の見える関係の中で問題解決を図るとともに、地域・分野を越えて、知見や情報を共有し、地域課題の解決や新たな取組みにつなげていくことで、お互いに切磋琢磨できる関係を広げるためのネットワークです。上流地域の人々だけではなく下流地域の人々にも参加いただくことで、上下流地域のつながりを形成し、共感と感謝を基盤とした支援の輪を広げることを目指しています。

□平成 25 年度第1回会議
日時　：平成 25 年9月 26 日(木)～27 日(金)
場所　：福岡県朝倉郡東峰村(とうほうむら)
協力　：東峰村ツーリズム協会

□平成 25 年度第2回会議
日時　：平成 26 年2月3日(月)～4日(火)
場所　：東京都千代田区

□平成 26 年度第1回会議
日時　：平成 26 年 10 月7日(火)～8日(水)
場所　：島根県雲南市、奥出雲町(さくらおろち湖(尾原ダム湖)周辺)
協力　：NPO法人さくらおろち
後援　：雲南市、奥出雲町

□平成 26 年度第2回会議
日時　：平成 27 年2月 23 日(月)～24 日(火)
場所　：東京都千代田区

□平成 27 年度第1回会議
日時　：平成 27 年 10 月6日(火)～7日(水)
場所　：福井県越前市(白山地区)
協力　：エコグリーンツーリズム水の里しらやま、しらやま振興会

□平成 27 年度第2回会議
日時　：平成 28 年2月9日(火)～10 日(水)
場所　：東京都千代田区

□平成 28 年度第1回会議
日時　：平成 28 年 10 月 25 日(火)～26 日(水)
場所　：岩手県奥州市胆沢(いさわ)区
協力　：(一社)いわて流域ネットワーキング、胆沢ダム水源地域活性化協議会

□平成 29 年度第1回会議
日時　：平成 29 年9月 28 日(木)～29 日(金)
場所　：滋賀県高島市
協力　：湖西夢(こせいゆめ)ふるさとワイワイ倶楽部

□平成 29 年度第2回会議
日時　：平成 30 年2月 20 日(火)～21 日(水)
場所　：東京都港区

□平成 30 年度第 1 回会議
日時　：平成 30 年9月5日(水)～6日(木)
場所　：長野県木祖村、愛知県名古屋市
協力　：木祖村、(一社)木祖村観光協会、(独)水資源機構 味噌川ダム管理所、NPO 法人木曽川・水の始発駅

□平成 30 年度第2回会議
日時　：平成 31 年2月 27 日(水)～28 日(木)
場所　：東京都千代田区、港区

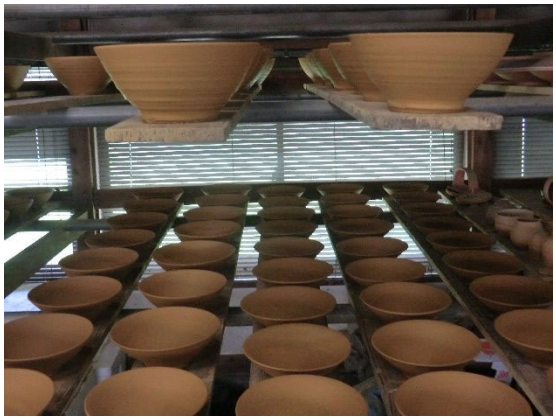
□令和元年度第1回会議
日時　：令和元年9月 26 日(木)～27 日(金)
場所　：奈良県川上村
協力　：川上村

■平成25年度第1回水源地域支援ネットワーク会議（福岡県東峰村）

集合写真

福岡県朝倉郡東峰村（とうほうむら）で開催した今回の会議では、参加者の意見等を踏まえ、参加者が実践しているフィールドを訪ね、座学と共に現地視察を併せて実施しました。

〈ネットワーク会議 DATA〉
日時：平成 25 年 9 月 26 日～27 日
場所：福岡県東峰村（とうほうむら）
協力：東峰村ツーリズム協会



小石原焼き、高取焼き窯元めぐり

現地見学

○東峰ムラ旅「小石原焼窯元めぐりと美しい村百選めぐり」

■小石原焼き、高取焼き窯元めぐり

■行者杉

■宝珠山きのこ生産組合

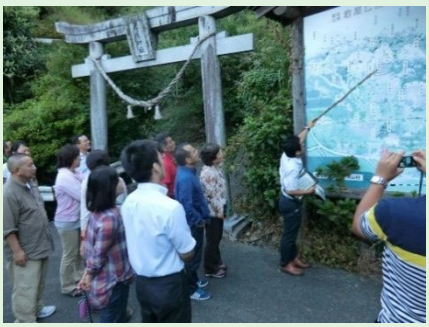
■岩屋神社

■平成の名水百選

小石原焼き、高取焼き窯元めぐり

行者杉

宝珠山きのこ生産組合



岩屋神社

意見交換

廃校の活用方法

・宿泊施設としての活用方法や、五右衛門風呂の設置や接客の状況など、参考になった点が多かった。
・参考となる地域のまねではなく、地域らしさを活かしていくことが重要である。

観光ガイドの実施手法

・地域の伝統などを物語として集約し、観光資源として活用するなどの工夫が必要である。
・強力なリーダーと、リーダーを支える仲間の存在が必要となる。

継続して活動を実施していくための留意点

・新規の顧客を多く獲得するのではなく、リピーターを獲得することが継続につながる。
・地域が観光客を選ぶことも必要で、価値観を共有できる観光客に来てもらいたい。
・他の地域のいいものをまねるのではなく、地域らしさを加えアレンジする必要がある。

講演

■水源地域の魅力を伝えるオーダーメイド観光の挑戦：小野豊徳　氏（東峰村ツーリズム協会会長）

魅力ある観光を考えた際に必要となるものは、ヒト・モノ・カネです。東峰村にはすばらしい観光資源があり、自分たちの手で村の魅力を発信する観光情報サイト「東峰見聞録」を立ち上げました。

村の魅力を体感してもらうためには、HP で観光情報を発信するだけではなく、村を訪れて体験してもらうことが重要です。東峰見聞録を見た人が、観光案内人を利用できるように申し込みに関する情報を掲載しました。観光案内人は、観光客のニーズに合わせた村旅の提案だけではなく、観光客に村の無力を伝え、村民との架け橋になります。

村に来てもらうことで、村の魅力を直接伝えられると同時に特産品の販売や飲食店での食事など様々な分野に経済波及効果が生まれています。観光案内をすることで、商品の魅力を理解してもらえるほか、単なる観光客として訪れた人ができないことも観光案内人が架け橋となることで求めに応じた観光ができます。

■通訳ガイドが見た　よそ者が惹かれる東峰村の魅力：水谷みずほ　氏（みずほトランスレーションビューロー代表）

東峰村には3年間で 10 回程度訪問しており、毎回違うメンバーを連れてきています。東峰見聞録で観光案内を頼んで良かったことは、窯元を訪ねる時の安心感や村人との交流など、ふと息を抜くことができる体験ができることです。小野さんのガイドでは、ネガティブな発言がなく、次はこんなことができる、こんなものが見ることができるなど、次のオプションを提示してもらい、再訪意欲を刺激してもらうことができます。毎回訪れるニーズに沿ったプログラムを提供してもらえるので、母親として、一人の女性として、外国人を対象としたガイドとして等、様々な視点で東峰村の魅力を発見することができました。

■北海道寿都町の活性化の取組みと東峰村の取組みについて：上田裕文　氏（札幌市立大学デザイン学部講師）

観光はまちづくりの集大成であり、風景は街の人相であると考えています。街の風景も環境整備だけではつくることができず、そこに住む人の営みが現れてきます。

地方大学では、地域貢献、学習、研究が重視されています。地域貢献する際に、学生の学習の場として活用しつつ、研究者として研究対象とすることが必要です。地域貢献と学習は対応できますが、それを研究するためには、活動等を普遍化し、一般化する必要があります。

大学がまちづくりに参入する際、どうしたら地域に受け入れてもらえるか、大学だからできることは何かを念頭に置いています。実践の中で出てきた課題としては、まちづくりの主役は誰かということです。まちづくりの主役を地元に置くことで、住民の参画を見込めます。そのためにも、リーダーの育成が必要なのです。

■平成25年度第2回水源地域支援ネットワーク会議（東京都）

集合写真

今回の会議では、水源地域における地域活性化の取組みを促進するために、参加者がお互いの顔が見える関係の中で問題解決を図ると共に、様々な知見や情報の共有を行いました。

具体的には、有識者による講演のほか、地域コミュニティビジネスにおけるマーケティング手法について学ぶグループ討議を行いました。

〈ネットワーク会議 DATA〉
日時：平成 25 年 2 月 3 日～4 日
場所：東京都

ワークショップの様子

講演

■「木曽三川流域連携事業について」：坪井康夫 氏（名古屋市上下水道局）

江戸時代、木曽川は水源地域で生産する木材を名古屋港まで運ぶ唯一の輸送手段として発展しましたが、材木は輸入材に、交通手段は川から鉄道や車にとって代わられたことで名古屋市と上流域とのつながりは希薄になってきています。名古屋市の上下水道事業に関わる者として水とのつながりに着目した取組みを行ってきました。

名古屋市の上下流交流事業は、「平成の名古屋市民の森植樹」として岐阜県中津川市にてヒノキあるいは広葉樹の植樹や、昭和 37 年より「木曽川さんありがとう」というイベントを行っています。名古屋と水源地域、即ち点と点のつながりで交流を続けてきました。

そうした中、水源だけではなく流域全体が疲弊しつつあることを受け新しい流域連携の形を模索することになり、平成 21 年 1 月に木曽三川上下流交流公開座談会を開催しました。上流域の課題は過疎化、農業の担い手不足、水源林の荒廃。一方下流域は水（赤潮、渇水、大雨被害など）、食（自給率の低下）、環境（生物多様性）の課題を持っています。いずれの課題も一つの地域で解決することは難しく、上流域と下流域が問題を共有化し、流域全体の課題として捉えることで解決に向けて相互理解と連携強化へ邁進しています。

自治体だけが協力するのではなく、民間あるいは NPO の皆さんがいかに動きやすい状況を作るかということが、名古屋市上下水道局のプラットホームとしての在り方であり引き続き上下流交流事業を行っていきたいです。

■「東京から故郷おこし～水源地域の魅力の発見・発信～」：川野真理子 氏（全国うまいもの交流サロンなみへいオーナー）

平成 10 年から 10 年間 NPO 法人をやっており、合同会社の設立を経て「なみへい」と言うお店を始めました。この店は飲食店ですが、コンセプトを「東京から故郷おこし」ということで、東京に居ながらにして、故郷出身の私たちが、故郷の農産物・海産物を食べることで少しでも農業の利益に役に立ちたいという思いから始めたお店です。

全く経験のない中でスタートさせたので最初は、なかなか軌道に乗らない時期もありました。地方の人が首都圏に求めているのは販路だけではなく、マーケティングのための借りられる場が欲しいということでした。それもずっと家賃を払って借りるのではなく単発で作れる場、食べさせる場、交流する場、PR する場、販売する場を求めていました。これらに応えられれば、本当の地域活性化の役に立てるかもしれないと思い、アンテナショップレストランという形態になりました。都市部にも、故郷を応援したい人がいるので、そういう人の思いやつながりを大事にしてください。

講演・ワークショップ

■「物語マーケティングを活用した水源地域におけるコミュニティビジネスの立案」:
嶋田俊平　氏((株)さとゆめ取締役チーフコンサルタント)

株式会社さとゆめは小さなコンサルタント会社で、「ふるさとの夢をかたちに」というコンセプトを持っています。いろんな地域の方が持たれている夢や思いをコミュニティビジネスにしたり商品にしたりしてお金が地域に返ってきてハッピーになるような、実際の形になるまで伴走していく思いでおります。
今回は物語マーケティングを紹介します。地域づくりには、ニーズへの適合や選択と集中が必要であり、中でも地域住民や他の地域の人々が交流をしてお互いにハッピーになる物語を紡ぐ、物語マーケティング手法が有効です。この手法の意義は大きく3つ。
①親しみやすくなる、②感情移入してしまう、③ゴールイメージが浮かぶ
物語マーケティングは、お客さん(ターゲットユーザー)を主人公として、いろんな協力者が出てきて、商品やサービスが重要な役割を果たしてハッピーエンドになる物語です。物語には「現状(越境)、危機、成長、勝利」の4つのステージを組み入れましょう。自由な発想で楽しく物語を考えていけば良く、その中に自ずとマーケティング要素がたくさん含まれます。このマーケティングは地域の潜在的な事業参画者が行えば、一番事業に繋がりやすいです。

ワークショップ

主人公が水源地域を訪れて、「主人公も地域も元気になる交流の物語」を考えてみよう！

物語マーケティングとして、「主人公(都市住民)が、水源地域を訪れて、「主人公も地域も元気になる交流の物語」を考えてみよう」というお題で地域資源を活用した「コミュニティビジネス」「新しい観光のあり方」の立案を4つのグループに分かれてワークショップ形式で行いました。
講師の嶋田氏からは、まずは楽しく物語を考えてもらい、その物語ができた後に、その内容を見てもらい実際に自分たちの村や町でやったら面白そうな点を見つける作業をしてもらえればと思います。物語マーケティングは、シナリオをつくることで終わるのではなく、さらに計画を実際の村や町に落とし込み充実させることで、より実践的なものになります、と講評がありました。

■平成26年度第2回水源地域支援ネットワーク会議（島根県雲南市、奥出雲町）

集合写真

島根県雲南市及び同県仁多郡奥出雲町に跨がるさくらおろち湖（尾原ダム湖）周辺においては、施設の管理者を含む地元関係者が、行政区域を越えた連携を模索し、地域の活性化のための取組みを行っています。

本会議では、参加者が現地を見学しながら、地元関係者から地域に対する思い、将来に対する展望や不安などを聞き、地元関係者を交えた意見交換を行いました。

〈ネットワーク会議 DATA〉

日時：平成 26 年 10 月 7 日～8 日

場所：島根県雲南市、奥出雲町（さくらおろち湖（尾原ダム）周辺）

協力：NPO 法人さくらおろち

後援：雲南市、奥出雲町

ワークショップの様子

現地見学

ダムの見える牧場

■ダムの見える牧場（牛の牧場）

地元を元気にしたいという乳製品メーカーが、ダム建設による残土処理場を有効活用し、放牧場として整備したものです。ここにＩターンした若手酪農家がメーカーの支援を受けながら放牧酪農に取り組んでいます。牧舎の壁には、子どもたちが自由に色を塗った牛の絵が描かれているなど、地域と一緒になった取組みを行っていました。

■さくらおろち牧場（馬の牧場）

馬とふれあうことにより、生きる力や自分の役割、やりがい等を実感するホースセラピーを行っており、若者を従業員として受け入れ、人材育成にも取り組んでいます。

■みざわの館

山陰屈指の中世城跡である要害山の麓にあった空き屋（古民家）を改築した交流拠点施設です。施設の管理、運営は地域の方々で構成する「とんぼの会」が行っています。館での食事は、とんぼの会の「おもてなし部」により、地元の食材を使った家庭料理が提供され、地域の産品と食文化を味わうことができます。みざわの館の周辺には歴史的遺構も多く、地元の方々のガイドで見学しました。

■尾原ダム堤体

ダム直下に集落があるため、騒音低減の観点から、放流の際の騒音・振動を抑える工夫がされた構造（水中放流方式）になっていることや、地域に開かれたダムとして、ダム堤体内の管理通路見学ツアーを開催するなど、地域と一緒になった取組みを行っています。

一意見交換「自分がこの地に住んだら何をしたいか？」

A 班

・ダム湖空間のスポーツ施設を活用した競技選手の育成をすればおもしろい。
・ダムと美術作品を組み合わせたアート空間の創出ができないか。
・スポーツアカデミーと女子旅、古民家活用等の各取組みのコラボレーションに取り組みたい。

B 班

・子供向けのプログラムやストーリーをつくれないか。
・「ダムに沈む夕日」など、これまで触れたことのない景色を、その季節や周辺情報と一緒に発信したい。
・地元の高齢者も若者も一緒に語り合う場をつくりたい。

地元参加者からの紹介

・ダムを核として周辺の各地域が繋がった。
・そのために地域の人の繋がりが生まれる場を作った。
・地域に必要なスキルを持った人材を積極的に呼び込んだ。
・地域の人に地域のことを知ってもらう活動をした。

講演

■交流歴16年、下流域から思う尾原ダム地域の可能性：
飯田幸一　氏（元NPO法人斐伊川流域環境ネットワーク事務局長）

奥出雲地域の活性化を、何でもいいから手伝いたい、という思いを持って 16 年間取り組んできました。尾原ダム周辺にある様々なもの（施設）の活用が進んでおらず、来訪者に「また来たい」と思わせる必然性や話題性が不足しており、それらが必要です。

アスリートのための食事を中心とした心身のメンテナンス場所として、また食育の観点からこの地域を位置付ける案もあります。

絵空事を実現するためには、計画と持続可能な資金が必要で、自分のプランや地域について、誇りを持ち、寄付金を募るようなことを恥ずかしげもなく語れるような人にならなければいけないと考えています。

■ダム湖とアウトドアスポーツの可能性：
森山尚　氏（しまねシーカヤックスクール　代表）

ダム湖は巨大なジム、スタジアムであるとの意識を持ち、複合型アウトドアスポーツ天国さくらおろち湖を提案し、やまたのおろち伝説にちなんだ8種のアクティビティを組み込んだイベントを企画しています。

また、カヤック体験だけでは、一度に 10 名程度の受け入れしかできませんが、他のダム周辺施設と連携し、ダム見学や動力ボート遊覧と組み合わせることで、大人数の受け入れが可能になり、さくらおろち湖全体を大学キャンパスと見立てたアウトドアアカデミーの実施を検討しています。

■花やかに生きていく～Okutabi にこめた私たちの想い～：
三成由美　氏（おくいずも女子旅つくる！委員会委員（奥出雲町職員））

奥出雲地域に若い女性を呼び込むことを目指し、女性の価値観を活かした奥出雲町の資源・人・資産の掘り起こしを提示する「おくいずも女子旅つくる！委員会」の活動をしています。

女性目線でのプロデュース（例：「伝える」ではなく「伝わる」、否定しない等）に取り組んでおり、「OKUTABI 応援！隊」会員は 500 名を超え、メディアなどの認知度も上がってきました。

これまで、地域の「資源」や「ひと」を紹介しており、今はそれらの掛け合わせとして見える価値を生むものとし「MUFUFU AUTUMN」を展開しています。

■平成26年度第2回水源地域支援ネットワーク会議（東京都）

集合写真

今回の会議では、参加者相互の交流を深めることにより、地域振興の新たな取組みを共同して進めていく関係の構築を目指すとともに、参加者に共通の課題である「地域の情報発信」の強化を目指しました。

具体的には、参加者が自らの活動や地域について発表し、互いに各々の経験を活かしたアドバイスをしあうワークショップを行いました。成功体験だけでなく、失敗体験についても参加者間で共有することができました。

地域資源やイベント等に関する実践的かつ効果的な情報発信に関して、実際に活動に取り組んでいる講師をお招きして講演を行いました。

〈ネットワーク会議 DATA〉
日時：平成 27 年 2 月 23 日～24 日
場所：東京都

ワークショップの様子

活動発表

活動発表の様子

活動発表の様子

参加者が互いの地域や活動をよく知り、共に地域の問題解決や、地域振興の新たな取組みを進めていく関係の構築を目指し、参加者が互いにプレゼンテーションを行い、意見交換を行いました。
プレゼンテーションは以下の8組の方が行いました。

[1] 栃木県市貝町
[2] 奈良県天川村
[3] 富貴・筒香田んぼつくりタイ
[4] 湖西夢ふるさとワイワイ倶楽部
[5] しらやま振興会
[6] NPO 法人 森
[7] 東峰村ツーリズム協会
[8] 愛知県名古屋市

参加者からは、互いの取組みの様子や失敗談、裏話のようなものが聞けたことや、会場からの意見を共有できたことなど、互いの活動を知る以上の収穫があったという声が聞かれました。

意見交換後の井上講師による講評では、地域づくりはビジネスと結びついたものでなくてはならず、地域づくりとビジネスは車の両輪です。また、イベントの開催自体が目的となってはいけない、企画には期限を設け、スケジュール感を持って取り組むことが必要、とのお話がありました。

意見交換

「健全な水循環の維持・回復のために、私たちができること、やってほしいこと」

A 班

・健全な水循環の維持、回復のためのキーワードは「企業」「交流」及び「教育」。
・上下流交流を盛り上げていくため、水循環の中で生活が成立しているという意識の啓発が必要。
・そのためには子供への教育が重要であり、教育課程の一部として設けられることが望ましい。
・こうした活動を継続していくためには、楽しみながら取り組んでいくことが重要で、流域全体として互いの満足度の向上が図れる活動となる必要である。

B 班

・子供向けのプログラムやストーリーをつくれないか。
・「ダムに沈む夕日」など、これまで触れたことのない景色を、その季節や周辺情報と一緒に発信したい。
・地元の高齢者も若者も一緒に語り合う場をつくりたい。

講演・ワークショップ

■見せ方でこんなに違う ～素材の商品化～：井上弘司 氏（地域再生診療所代表執行役）

名古屋港は木曽川が江戸時代では水源地域で生産する木材の唯一の輸送路として発展しましたが、材木は輸入材に、交通手段は川から鉄道や車にとって代わったことで名古屋市と上流域とのつながりは希薄になってきています。名古屋市の上下水道事業に関わる者として水とのつながりに着目した取組みを行っています。

名古屋市の上下流交流事業は、「平成の名古屋市民の森植樹」として岐阜県中津川市にてヒノキあるいは広葉樹の植樹や、昭和 37 年より「木曽川さんありがとう」というイベントを行っています。名古屋と水源地域、即ち点と点のつながりで交流を続けてきました。

そうした中、水源だけではなく流域全体が疲弊しつつあることを受け新しい流域連携の形を模索することになり、平成 21 年1月に木曽三川上下流交流公開座談会を開催しました。上流域の課題は過疎化、農業の担い手不足、水源林の荒廃。一方下流域は水（赤潮、渇水、大雨被害など）、食（自給率の低下）、環境（生物多様性）の課題を持っています。いずれの課題も一つの地域で解決することは難しく、上流域と下流域が問題を共有化し、流域全体の課題として捉えることで解決に向けて相互理解と連携強化へ邁進しています。

自治体だけが協力するのではなく、民間あるいは NPO の皆さんがいかに動きやすい状況を作るかということが、名古屋市上下水道局のプラットホームとしての在り方であり引き続き上下流交流事業を行っていきたいです。

■人が集まる！行列ができる！イベント企画とチラシの作り方：坂田静香 氏（NPO 法人男女共同参画おおた理事長）

平成 10 年から 10 年間 NPO 法人をやっており、合同会社の設立を経て「なみへい」と言うお店を始めました。この店は飲食店ですが、コンセプトを「東京から故郷おこし」ということで、東京に居ながらにして、故郷出身の私たちが、故郷の農産物・海産物を食べることで少しでも農業の利益に役に立ちたいという思いから始めたお店です。

全く経験のない中でスタートさせたので最初は、なかなか軌道に乗らない時期もありました。地方の人が首都圏に求めているのは販路だけではなく、マーケティングのための借りられる場が欲しいということでした。それもずっと家賃を払って借りるのではなく単発で作れる場、食べさせる場、交流する場、PR する場、販売する場を求めていました。これらに応えられれば、本当の地域活性化の役に立てるかもしれないと思い、アンテナショップレストランという形態になりました。都市部にも、故郷を応援したい人がいるので、そういう人の思いやつながりを大事にしてください。

■平成27年度第1回水源地域支援ネットワーク会議（福井県越前市）

集合写真

今回の会議では、参加者相互の交流を深めることにより、地域振興の新たな取組みを共同して進めていく関係の構築を目指すとともに、参加者に共通の課題である「地域の情報発信」の強化を目指しました。

具体的には、参加者が自らの活動や地域について発表し、互いに各々の経験を活かしたアドバイスをしあうワークショップを行いました。成功体験だけでなく、失敗体験についても参加者間で共有することができました。

地域資源やイベント等に関する実践的かつ効果的な情報発信に関して、実際に活動に取り組んでいる講師をお招きして講演を行いました。

会議の様子

〈ネットワーク会議 DATA〉
日時：平成 27 年 10 月 6 日～7 日
場所：福井県越前市
協力：エコグリーンツーリズム【水の里しらやま】、しらやま振興会

現地見学

■しらやまいこい館

越前市とコウノトリとの歴史や取組み、コウノトリの特徴や暮らし方などがパネルやモニターで紹介されています。屋外のケージで飼育されているコウノトリの様子をライブ映像で確認することもできます。

■勝蓮華(しょうれんげ)の滝

この滝は地元の方が偶然発見したもので、しらやま振興会が遊歩道や展望スペースを整備しました。しらやまで一番大きな滝が地元にも全く知られていなかったということには参加者一同驚きでした。今後、看板なども設置し地域資源として活用していきたいということです。

■みどりと自然の村　太陽の広場

昭和 56 年に整備された野外活動施設です。レストハウス、キャンプ場、バーベキュー場などを備えています。芝生広場は約6万㎡の広さ、夏場は家族連れに人気のスポットとなっていますが、冬季の施設活用に課題を抱えているということでした。

■段田清水(だんたしょうず)・金華山グリーンランド

キャンプ場やコテージなどがあり、夏場は県内だけでなく県外からの利用者も多いとのことです。段田清水の水質の良く、「ふくいのおいしい水」として福井県から認定された水です。
(説明者:金華山振興組合)

■解雷ヶ清水(けらがしょうず)

百済の伝説の残る清水で、地元の集落の人々が不動明王を祀り、霊水として大事に整備・管理しています。「ふくいのおいしい水」として福井県から認定された水で、周辺の岩肌からも湧水が溢れ出るほど豊かな水量を誇っています。

■冬水田んぼ・コウノトリゲージ

冬水田んぼ(冬季湛水。春先にたくさんの微生物を育む。)や土作りなど、農薬や化学肥料を使わない「コウノトリ呼び戻す農法米」を実践しています。また、田んぼの中にはコウノトリの飼育ゲージがあります。コウノトリは臆病なため近づくことはできませんが、農道に設置された双眼鏡で観察することができます。

■ほたるカフェ

廃校になった旧白山小学校第一分校を活用して、期間限定で開店しています。当時のまま残された木造校舎には給食室や音楽室が保存されており、カフェ以外の活用方法も検討されています。

講演

講演の様子

■「ないものねだり」から「あるもの探し」へ：
結城登美雄　氏（民俗研究家））

長年全国各地の農山漁村を訪れてきたが、自分たちの町には「スーパーもない、コンビニもない」と言って、都市化すれば町が良くなるという考え方が地域を支配していることがあります。町を歩くと、そこでこれまで生きてきた人たちが大事にしてきたものに出会えます。ないものねだりで愚痴ばかりでなく、あるものを受け止めて活かし方について話をしていこうと各地で呼びかけ続けています。

現地見学でも観たとおり、白山には様々な資源があるが、もうひとつ、食べ物へ具体的にアプローチするといいです。「食」には家族の記憶がつまっています。そこには「技」が一緒にあります。食べ方、活かし方などまさに「生きる技術」です。そうした「食」や「技」が失われてしまうのはもったいないです。食べ物をアピールするには、食べられる場所がほしいです。白山のコウノトリのお米を、白山で食べられる場所があったらいいと思います。

意見交換

「ヨソモノから見たしらやまの魅力等について」

A 班

・地域内の団体のつながりを強くし、地域を元気にする人材の育成を継続的に行える体制づくりが大切。
・資金確保策としての適切なガイド料の設定、来訪者にあわせたツアー内容をつくるといい。
・周辺市町を巡るコース設定にするなど他地区と連携できるといい。
・日本らしい風景、スギの木立が美しい。売りになる素晴らしい景色だ。
・バーベキュー場があるので、ジビエにも活用できるだろう。
・廃校を活用したほたるカフェは非常に魅力的。夏だけでも土日開催できる体制ができるといい。

B 班

・地元の方々がやりたいことをやる、楽しいと思うことをやるのが大事。
・地元の楽しみの場（たまり場）をつくることが必要。
・地域のおじいちゃん、おばあちゃんの話を聞いて、ツーリズムのネタに。また、知恵と技を引き出して地元の子どもに伝承すべき。

おしえて！ しらやま素敵ポイント

会議参加者が現地見学中にしらやまの魅力だと思ったものを写真に撮ってもらい披露し合いました。地元の人には何でもないものが外の人からみると素晴らしいものだという気づきに役立ちました。

■平成27年度第2回水源地域支援ネットワーク会議（東京都）

集合写真

今回の会議では、参加者相互の交流を深めることで各々が地域振興の新たな取組みのヒントを得ることを目指すとともに、活動情報の発信などに役立つ「伝え方」について学びました。

具体的には、参加者が自らの活動について発表し、各々の経験を活かして互いにアドバイスするワークショップなどを行いました。

また、地域資源やイベント等に関する効果的な情報発信手法として、受け手の立場に立った伝え方やテクニックなど、「見せる」コツについてワークショップを通して学びました。

〈ネットワーク会議 DATA〉
日時：平成 28 年2月9日～10 日
場所：東京都

ワークショップの様子

講演

■地域の魅力づくりと社会的水循環：中庭光彦　氏（多摩大学経営情報学部教授）

日本では、多くの魅力に水循環が関係しています。「水」があらゆるコトに、あらゆるモノに関係している。これまでの「水」は農業や工業の資源として重視されてきましたが、これからは3次産業の「水」、すなわち観光地の資源として、質の高い食を保証する資源として、ハイグレードな体験を提供する資源として、生態系の資源として、重視されるようになっています。

全国各地の、水文化を活かした多様な地域づくり活動をいろいろと紹介しましたが、水そのものというよりは、水を利用して何か新しくて面白いことをしようと取り組んでいる人たちが多いと感じています。そうした単なる水循環ではなく、水を資本にした新たな活動、連鎖が「社会的水循環」です。

水循環の連鎖には、水を資源にした活動で満足したいというエネルギーも必要です。水は大事なものですが、いくつかの地域資源の一つであり、水を供給しているから水源地を大事に、というだけでは説得力をもちません。水を資本に、どのような価値を人々に届けるかが問われています。水資源に価値があると感じる人々によって、水（水文化）は守られるものです。

今後、人口減少に伴う地域課題等をいくら潰していっても根本的な問題の解決は難しいです。それよりも全く新しい魅力をつくって、問題を逆手にとって新しい地域づくりをやっているところが参考になると思います。既存の価値観の中でやらずに、まずは自分たちが「面白い」と思うことをやることが一番大事です。

■伝わるコミュニケーション：落合直樹　氏（国土交通省大臣官房広報課広報戦略企画官）

ひとに何かを「伝える」ということは、仕事を進めるうえで誰にとっても悩ましい課題です。コミュニケーションは、よく「キャッチボール」に例えられます。相手は様々であり、その構えている相手にボールを投げるのですが、大事なのは構えているところ（受け手の聞きたいこと）にボールを投げる（言いたいことを伝える）ことです。でないとキャッチボールは成立しません。すなわち、受け手の関心や問題意識をふまえる（相手の立場に立つ）ことがポイントです。その上で、自分らしさを出して伝えなければなりません。プレゼンでも企画書でも、そこには送り手の「ひととなり」が表れるものです。

資料の作り方について、プレゼン資料と説明資料は違います。送り手はできるだけ多くの情報を伝えたいと思うものです。受け手はパッと内容を掴みたいと思っています。プレゼン資料は「見て」伝わるもの、説明資料は「読んで」理解するものということを意識してほしいです。そのためには、伝えたいメッセージを最短距離で伝えて、受け手の脳を活性化し心に訴える（受け手の力を借りる）ことが大事です。「何を言うか」は、「何を言わないか」を決めることです。「言わない＝封印」ではなく、不足分は質疑で補うことができます。受け手に自分ごととして受け取られるかどうかがポイントになってくるので、興味・関心にあわせてターゲットをしぼることが必要です。

活動発表

活動発表の様子

活動発表の様子

参加者が互いの地域や活動を知り、共に地域の問題解決や地域振興の新たな取組みを進めていく関係の構築を目指し、活動発表を行い、意見交換しました。プレゼンは以下の9組の方が行いました。

[1] 一般社団法人いわて流域ネットワーキング
[2] NPO法人最上川リバーツーリズムネットワーク
[3] NPO法人エコマラソン・インターナショナル
[4] 認定NPO法人JUON NETWORK
[5] NPO法人ジャパンフォレストフォーラム
[6] あざおね社中
[7] しらやま振興会
[8] 下呂市 観光商工部 観光課
[9] 東峰村ツーリズム協会

意見交換後、中庭講師からは、どの地域活動でも「物語」をつくっているところが共通している。地域づくりの物語としてはある程度完成されてきており、今後地域ブランドができてリピーターがつき始めるだろう、とのお話がありました。

ワークショップ「伝わるコミュニケーション」資料づくりの実践

国土交通省のプレスリリースの作り方を材料にして、各グループがイベント企画の宣伝資料を創作しました。インパクトがあり、明快な見出し（タイトル）、リリースの核心に触れる（エッセンスを凝縮した）リード、背景や経緯、特徴を紹介した本文、の3つが「逆三角形（結、起承転）」になるイメージで作成することを意識して作業に取り組みました。

ワークショップの様子

■平成28年度第1回水源地域支援ネットワーク会議（岩手県奥州市胆沢区）

集合写真

岩手県奥州市で開催した今回の会議では、「地域の宝を活かし、経済的に自立して活動していくには？」をテーマに地域の活動拠点や地域資源を見学するとともに、参加者それぞれの経験やアイデアを持ち寄り、奥州市ひいては北上川流域を活性化する方策を考えるため、地元活動者及び外部講師からそれぞれ講演を行い、出席者が互いに各々の経験を活かした意見交換を行いました。

〈ネットワーク会議 DATA〉

日時：平成28年10月25日～26日

場所：岩手県奥州市胆沢（いさわ）区

現地見学

胆沢ダムやダム直下の胆沢川カヌーコース（2016いわて国体に利用）等、今後の活用が期待される施設を視察しました。それぞれの施設では、施設の関係者から概要等の説明を受け、今後の活用や展望についての話を伺いました。

また、地元の団体の活動拠点として利用されているセミナーハウス（農家の古民家を改修した施設）で講演や意見交換を行いました。

現地見学の様子

講演

■ローカルベンチャーがなぜ地方でウケるのか。：
井筒耕平　氏
（村楽エナジー株式会社　代表取締役）

ローカルベンチャーとは、地域資源を活用しながら、自由な発想で事業を起こし、しっかり稼ぐことであり、地方には、活用されていない資産が豊富、都会でするより費用が安くローリスクミドルリターン、人材不足といった要因で起業機会が山ほどあるのが魅力です。

プロジェクトを行う上で必要な役割は、「プロデューサー（お金と想いがあるが専門性がない人）」「ディレクター（専門性がありプロジェクトを引っ張っていくことができる人）」「マネージャー（現場で管理する人）」及び「オペレーション（プロジェクトを実行する人）」の4つがあり、地方では、特にディレクターが不足しています。

西粟倉村では、課題解決のために取り組むというよりも、ローカルベンチャーとして活動した結果、課題解決に結びつけていくという雰囲気があり、外から来たローカルベンチャーが課題解決型の地元企業と共存できています。

また、地域おこし協力隊の活用にも、西粟倉村では特徴があります。地域おこし協力隊の全国共通の問題として3年後に協力隊を卒業しても仕事がないという点がありますが、西粟倉村では、3年後に路頭に迷わせないために2つの型を用意しています。一つ目は、起業した協力隊員に活動経費を負担する「起業型」。二つ目は、「就職型」で、ローカルベンチャーに卒業後の採用を見据えて隊員を雇ってもらう形。給与等は村が負担することになっています。

■北上川水源地域の活動について（四十四田、御所、湯田）：
佐井守　氏（いわて流域ネットワーキング）

四十四田さくらまつりは、四十四田ダム近隣の住民が主体となって行われており、地域の伝統技能やキッズダンスを披露する湖畔ステージショーや、近隣地域のゆるキャラが集合するキャラクター交流会等で交流を図っている他、流域うまいもの市や地元のみんなの商店街を開催し、水源地域の特産品を販売しています。

「水源地子ども交流会」は、視野と交流の輪を広げることと健全教育を目的として開催しており、特に廃校になった旧南山形小学校の校舎の2階から行う流しそうめんは人気プログラムとなっています。

湯田ダムカレーは、道の駅等で提供されており、湯田ダムで入手したダムカードの提示で割引があります。このカレーは季節毎に食材を変える工夫をしており、クオリティが高く人気のメニューとなっています。

講演②

■岩ダムカフェについて：早坂桃子氏 、嵯峨檀氏（岩手大学同好会「川部」）

岩手大学同好会「川部」は、川を楽しむことで川を通じて、自然環境や流域の水辺について、地域との関係性を学び、それを発信していくことを目指して活動しています。

岩ダムカフェは、胆沢ダムフェスに合わせて管理支所1階の展示スペースを借りて営業しています。来場者からは、「ダムでコーヒーが飲めると思わなかったので嬉しい」や「コーヒーを飲みながら良い景色を見られて嬉しい」といったダムとカフェの組み合わせに新しさを感じる内容の意見が多く寄せられ好評でした。

平成 28 年夏の開催では、メニューの充実を図り、客層は、子どもから年配の方までと幅広い世代の方に利用してもらうことができました。

■遠野、薪の駅プロジェクトについて：千葉和氏（NPO 法人遠野エコネット 代表理事）

放置されている間伐材を活用し、「薪づくり倶楽部」を毎月開催しています。薪割り参加者に薪券（軽トラック1台分の薪と交換できる）を配布しています。

山仕事の見方を変えることや間伐業者不足を補うため、「遠野山仕事はじめの一歩講座」を開催しています。山主や山に興味がある人を森林ボランティアとして呼び込んで人材育成を図るほか、山仕事のハードルが高いイメージを払拭するため、特に女性を呼び込んでおり、今年の参加者数は女性が男性より多かったです。

その他、マツ枯れ被害対策としてマツの炭づくりや田瀬湖の一斉清掃、猿ヶ石川でのモニタリング調査、植樹活動等環境保全・再生活動も行っています。

意見交換

「奥州市全体の活性化につながるアイデア出しを！」

参加者が車座形式で奥州市の活性化のためのアイデアを出し合い、参加者がそれぞれの活動内容を紹介し、課題や工夫点について話し合う場となりました。

・地域の人間、財産をいかに発掘していくかが1番重要。地域をより良くするには、地域の人間がその地域で楽しく過ごせる環境を作り、その延長で外から人が入り地域を興していければ最高の形。

・堤体登山やカヌー、サイクリングを組み合わせて丹沢ダムトライアスロンとして競技性をもたせて開催できれば面白いのではないか。

・市町村合併によって、地域と行政の距離が空いてしまったと住民、職員それぞれが感じている。今回の会議に出席してみて、地域住民と行政が話をできる場があれば良いと感じた。

会議後には、「参加者から互いの活動内容や経験談等が聞けて参考になった」「全国から人が集まり情報共有をすることができる場があるのは良い」という声が聞かれました。

講演③

■胆沢ダム水源地域の活動について：菊池拓巳　氏（いわて流域ネットワーキング理事）

胆沢ダムで「胆沢ダムフェス」を開催し、管理支所内でのカフェ営業や地元特産品の販売、調整池でのカヌー体験を用意しています。また、「胆沢ダムフェス 2016in 夏」では、新たに堤体登山やラフティング体験を、「胆沢ダムフェス 2016in 秋」では、湖面の巡視体験や奥州湖でのカヌー体験を用意しました。特に湖面の巡視体験は人気でした。

ダムの他にも、胆沢川を「川のレスキュー講習」の場として活用しています。岩手県内では、講習を行える条件の揃った場所があまりないですが、胆沢川は非常に条件が揃っているのです。

■水辺がつなぐ地域活性化：田中里佳　氏（国土交通省河川環境課課長補佐）

土佐堀川（大阪市）、宮川（高山市）、乙川（岡崎市）など全国各地の代表的なミズベリングプロジェクトを紹介しました。プロジェクトの当事者は、計画する人、つくる人だけでなく、使う人も一緒になって考える必要があります。

また、水辺の利活用のポイントは、1.どう使うかを考える、2.ひとりでは無理でも得意分野を持つ数人が集まればできる、3.小さなことでも成功を重ねプラスのスパイラルを作ることです。

公共空間を活用する際、「川」は他の公共空間（公園や道路）と異なり、自然と人との営みの曖昧な境界があり、災いと恵みを与える存在であり、この曖昧な境界が川の良さでもあり、このことを認識して感謝と畏れの気持ちを忘れずに活用していくことが大事です。

講演の様子

■平成29年度第1回水源地域支援ネットワーク会議（滋賀県高島市）

集合写真

滋賀県高島市で開催した今回の会議では、参加者が現地で体験を交えながら、地域の活性化に取り組む団体の活動内容について話を聞くとともに、活動を行ううえでの課題や将来の展望等について参加者同士で意見交換しました。

〈ネットワーク会議 DATA〉
日時：平成 29 年9月 28 日～29 日
場所：滋賀県高島市
協力：湖西夢（こせいゆめ）ふるさとワイワイ倶楽部

川島酒造

針江生水（はりえしょうず）の郷

現地見学

■かばたの様子

高島市新旭針江地区では、豊富な湧き水を利用した「かばた」と呼ばれる特徴的な洗い場や水場についての見学と地区住民による説明を受け、その後湧水を利用して酒造りに取り組む川島酒造の川島社長より酒造りや針江地区についての説明を受けました。

■竹細工などの体験

「湖西夢ふるさとワイワイ倶楽部」の着地型の体験観光の場や企業研修の場になっている竹林整備の現場を訪ね、団体の活動内容についての説明を受けながら、竹林整備や竹細工の体験などを行いました。

参加者による活動発表・意見交換

参加者が高島市における活動を知ることを通して、共に地域の問題解決や地域振興の新たな取組みを進めていく関係の構築を目指し、「グリーンツーリズム・エコツーリズムによる歓交※で地域づくりの循環」と題して地元で活動する以下の5団体の方々が発表を行い、意見交換しました。

※「歓交」は造語で「歓」は近江商人の三方良し、「交」は交流を意味する

① 公益社団法人びわこ高島観光協会
② 畑の棚田
③ 針江生水の郷委員会
④ アドベリー生産協議会
⑤ 湖西夢ふるさとワイワイ倶楽部

活動発表の様子

ワークショップの様子

講演

■高島　森里湖研究の 35 年～ないものねだりからあるものさがしに～：嘉田由紀子氏（びわこ成蹊スポーツ大学学長）

滋賀県、琵琶湖、高島市には、ないものねだりではなく、あるものを探せば、生かすことのできる資源がたくさんあります。地域の子どもたちにも高島の魅力を伝えたいと思っています。

水道導入前の昭和 30 年代は琵琶湖畔の集落の 22%は飲み水を湖水、川水、山水から取っていました。地下水ではなく表流水も飲めたのは、地域全体で湖を汚さないように工夫がなされていたからです。

また、滋賀県は、情報化が進んでおり、それに伴って工業生産性が全国一，二を争っています。大変効率のいい工業と、農業が同時代に縦にあるのがこの滋賀県なのです。

■水源地域のいまとこれから：岡良介（国土交通省水源地域振興室室長）

今の水源地域、特に山村地域は減少傾向が顕著にあります。最近は、水と人間との共生に対する関心がかなり高まってきており、「ミズベリング」をはじめとした自分たちの水資源、水源地域を見直して新しい地域づくりをしていこうという活動が全国で起こっています。

また、ダムそのものについての関心も非常に高まってきており、ダムを使った様々なイベントが行われています。水源地域には、ダムがあるかないかには関係なく、様々な場として提供できる機能があります。

ポスターセッション

地元関係者24団体によるポスターセッションを実施し、参加者同士の交流を深めるとともに、活発な意見交換を行いました。

総括としてファシリテーターの安藤氏から「地域で困っている課題はどこかで誰かが声を出して具体化することが重要」とお話しがあった後、高島市の活動全体に対して以下のような意見がありました。

・高島市で活動している女性の多さに感動しています。私は岩手県で5つのダムの水源地域ビジョンを統括していますが、女性が活動している地域は成功しています。

・高島市では様々な所で活動があり、活動している人はそれぞれ高島市をどうにかしようという意欲がたくさんあると思っています。

・関係人口を増やす制度も利用しながら皆様の活動を広げてほしいです。

ポスターセッションの様子

■平成29年度第2回水源地域支援ネットワーク会議（東京都）

集合写真

〈ネットワーク会議 DATA〉
日時：平成 30 年2月 20 日
～21 日
場所：東京都

今回の会議では、福岡県東峰村職員及び林野庁職員による講演のほか、有志の会議参加者による日頃の活動内容の発表と意見交換を行いました。意見交換では、参加者が自身の経験に基づく意見やアイデアを出し合い、参加者全体で活発な情報交換を行いました。また、食料品分野におけるマーケティングコンサルティングの有識者より講演いただき、その後、ワークショップを実施しました。参加者が自ら体験（商品のブラインドテスト）することを通じて特産品に対する消費者の購買意識の実態を学べる機会となりました。

活動発表

参加者が互いの地域や活動を知り、共に地域の問題解決や地域振興の新たな取組みを進めていく関係の構築を目指し、以下の8団体による活動発表と意見交換を実施しました。

［1］NPO法人さくらおろち
［2］NPO法人最上川リバーツーリズムネットワーク
［3］奈良県川上村
［4］長野県木祖村
［5］一般社団法人藤野観光協会
［6］あざおね社中
［7］しらやま振興会
［8］東峰村ツーリズム協会

活動発表

講演の様子

■特産品の販売や企画などについて：日高泰仁氏（ローカルプロダクトイラストレイテッド　プロデューサー）

総合食品商社で販売・企画業務を中心に全国各地の特産品の発掘を手掛けてきた経験を踏まえ、生産者やバイヤー、消費者等のそれぞれの視点で、特産品を売り出す際の留意点等について講演いただきました。

また、講演後にはワークショップを実施しました。現在市場に多数の種類が流通しているドレッシングを事例に、大手メーカーの商品とアンテナショップや道の駅で販売されている地域の特産品について、参加者が試食等を通じて価格や味、購買意識を比較し、商品の差の程度について確認するとともに、消費者の目線を意識した商品の企画及び販売方法について学びました。

ワークショップで使用した資料

ワークショップの様子

講演

■九州北部豪雨災害-被災地からの報告～激甚災害発生の理由と防災・復興への取組み～：小野豊徳　氏（東峰村役場建設水道課課長補佐）

福岡県東峰村は、江川ダム・小石原川ダムに流れ込む小石原川の源流に位置する水源地域です。この東峰村を含む九州北部を襲った平成 29 年7月5日の豪雨災害について、その被害状況と復旧に向けた取組みをはじめ、報道だけでは知り得ない現地での体験談をご講演いただきました。概要は以下のとおりです。

平成 29 年7月5日に東峰村を中心に、743 ミリの豪雨がありました。東峰村の被害状況は、死者3名、負傷者2名、重傷者1名、軽傷者1名。全壊 26 戸、半壊 37 戸でした。

求められている対応は、河川の氾濫や、山林からの土砂の対策、安全な暮らしを取り戻す、村の中の道路や橋梁などの復旧、農林業、商工業の再生、美しい村でもあることから復旧工事には環境や景観に配慮したこともしてほしいという意見も出ています。

今後は、九州大学や住民の意見も踏まえながら復興計画を作成していきます。九州北部豪雨災害視察研修の受け入れも開始しましたが、物見遊山ではなく、本当に地域に役立ちたいという気持ちがある人を受け入れています。

■流木災害等に対する治山対策の取組み：齋藤絵理　氏（林野庁森林整備部治山課　治山対策官）

水源地域の多くは中山間地域に位置し、森林面積の割合が高い地域が多いです。そのため、森林管理の状況と水源地域の現状には深い関わりがあります。そこで今回は、我が国の森林整備の状況をはじめ、近年の山地災害の発生状況、治山対策についてご講演いただきました。講演の概要は以下のとおりです。

近年の山地災害の発生件数自体は減っています。これは森林が成熟し、災害防止機能を発揮してきていることや、治山の工事、国土交通省が行っている砂防工事、河川工事等が進歩してきたことが大きく影響しています。

治山事業の概要は、森林整備や治山施設の整備のようなハード対策だけではなく、警戒避難や法的な規制等の対策を色々組み合わせて実施しています。治山事業は森林の維持、造成、健全な森林を育成していくことにより、水源の涵養や山地災害の防止を図り、国民の生命、財産を保全することです。

残念ながら全ての箇所の災害を事前に防止することは不可能のため、警戒避難行動を促すソフト対策も重要で、林野庁としては山地災害危機地区という危険箇所の明示や、防災活動への支援活動等の情報提供を今後も進めていきます。

■平成30年度第1回水源地域支援ネットワーク会議（長野県木祖村、愛知県名古屋市）

集合写真

長野県木祖村では、木曽川源流の里として様々な上下流交流事業を展開しており、行政や地元関係者が連携して、地域活性化のための取組みを行っています。

地域の活動拠点や地域資源を見学するとともに、地元活動者及び外部講師からそれぞれ講演を行いました。

〈ネットワーク会議 DATA〉
日時：平成 30 年9月5日～6日
場所：長野県木祖村、愛知県名古屋市
協力：木祖村、(一社)木祖村観光協会、
(独)水資源機構味噌川ダム管理所、
NPO 法人木曽川・水の始発駅

活動発表

参加者が木祖村における地域活性化の活動を知り、共に地域の問題解決や地域振興の新たな取組みを進めていく関係の構築を目指すとともに、全国各地からの参加者と共に意見交換を実施しました。

■木曽川上下流交流事業と木祖村の地方創生：高柳政次 氏（一般社団法人木祖村観光協会）

平成29年10月に木祖村観光協会を一般社団法人化し、もともと役場で行っていた上下流交流事業を担っています。

味噌川ダム竣工以降、下流自治体との交流を進めてきました。名古屋市の水道設備企業経営者の協力を得て、平成20年に木祖村名古屋出張所・アンテナショップを開設し、東海地域在住の村出身者で組織する「木祖村人会」も立ち上げました。

下流域の自治体や民間企業、団体、水道局等とは、緑化推進事業や研修、ツアーの実施、地元産間伐材活用製品による経済交流等、幅広い交流事業を行っております。

現地見学

■木祖村アンテナショップ

名古屋市で地場産品のPR・販売を行うことで、上流地域の活性化につなげています。雇用創出や移住定住に向けた情報発信・情報収集も進めていく予定です。

■味噌川ダム

ダムを活用した地域活性化策として、漕艇の利用や山羊の除草隊の導入、日本酒「木曽路」のダム貯蔵等を実施しています。

■緑化交流事業植林地

緑化事業に協力している名古屋市内の企業の社員に緑化活動を実際に体験してもらうため、植林や育樹作業を行うことで交流を深めています。

■水木沢天然林

木曽川の源流、水木沢地区に広がる天然林であり「平成の名水百選」に選ばれています。

講演の様子

また、木曽地域の自治体と愛知中部水道企業団と協定を結び、水道利用料金の一部を基金に積み立て木曽地域の森林整備の費用に充てる取組みも行っています。

交流事業を展開する上では信頼関係が重要であり、この信頼関係を各施策とも連動させ事業展開していくことが必要です。観光協会として観光客を増やす取組みを行うことに加え、村民や会員自らが稼ぐ力を付けることも必要であり、木祖村らしい観光地経営を行うことで地域の経済発展を目指しています。

講演

■関東一小さな村のユーモア＋マジメな地域活性化の取組み：小村幸司氏（NPO法人小さな村総合研究所 代表理事）

山梨県丹波山村は多摩川の源流域に位置しています。この地に4年前に地域おこし協力隊として移住し、地域活性化の取組みを数多く実施してきました。

成功している取組みとして、平成 28 年に伊勢志摩で開かれた「G7 サミット」と同時期に、日本全国の小さな村を7つ集めた「g7 サミット」の開催を企画し、小規模な自治体同士が連携した地域活性化策を展開しています。7つの村の役場職員同士や若者同士のつながりを構築することで、ふるさと納税やイベント等での連携といった地域活性化の取組みがさらに広がりつつあります。

また地域活性化のためには、コンサルタント等に頼るのではなく「村民が自ら決めること」が有意義であるということを実感してもらう狙いもあり、役場職員等が審査員となり全国から地域活性化策を募るアイディアコンテストを開催しています。これまでに開催した2回とも、質・量ともに予想以上の応募があることから、全国には自らのアイデアを町づくりや町おこしに活かしたいと考える人が多いと言えます。

さらに、山梨県内で初めての取組みとなる「村民タクシー」は、全国の類似事例を視察調査した上で、丹波山村に合う形にカスタマイズしています。略称を「ソンタク」としたことでメディアの関心も集めやすく、報道をきっかけとして新たなつながりも生まれています。

「寛容性」があることで人を呼び、さらに人が人を呼んでくるなど、地域活性化の取組みを行う上では「寛容性」がキーワードであると感じています。

講演の様子

講演の様子

■「・・・」から「？」に。「？」から「！」に。「！」から「！！！」。木曽川・水の始発駅の“伝える活動”：岩原大輔 氏（NPO法人木曽川・水の始発駅）

味噌川ダム完成に伴って策定された「水源地域ビジョン」に基づいて活動を開始し、平成22年NPO法人化し、より住民主体での“伝える活動”を行っています。

“伝える活動”としては、カヌーや山菜採りといった体験イベント、天然林や中山道等での観光ガイド、グリーンツーリズム事業等を行う「遊牧民プロジェクト」、景観整備や環境整備を行う「地域の彩りプロジェクト」、地域の食材を活用した商品開発や喫茶店事業を行う「食の塩梅プロジェクト」の3つがあります。

“伝える活動”を行っていますが、最終的には、双方向的な“伝わる活動”となることを目指しています。木祖村を知ってもらい、それにより生じた疑問を通じてさらに興味を持ってもらい、そしてまた新たな広がりにつながっていくような活動を今後も続けていきます。

■平成30年度第2回水源地域支援ネットワーク会議（東京都）

集合写真

今回の会議では、中央合同庁舎3号館において、水源地域における振興の取組みや観光資源、特産品等を紹介するPRフェアを行いました。その後、水源地域での活性化についての発表と意見交換を行いました。お土産のデザインに関するワークショップのほか、有識者による講演を実施しました。ワークショップと講演を通じて、参加者がお土産をデザインする際にサービスデザインという視点から考える手法についてと、地方創生とSDGsの関係について学ぶことのできる機会となりました。

〈ネットワーク会議 DATA〉
日時：平成31年2月27日～28日
場所：東京都

活動発表

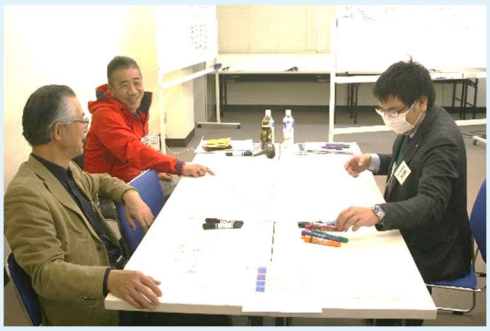
以下の7団体による活動発表と意見交換を実施しました。

［1］一般社団法人いわて流域ネットワーキング
［2］一般社団法人藤野観光協会
［3］あざおね社中
［4］水の里しらやま
［5］有限会社サンスペースアメニティ
［6］奈良県川上村
［7］合同会社東峰村ツーリズム協会

活動発表の様子

講演

講演の様子



ワークショップの様子

■サービスデザインを通したお土産のデザイン：
上田裕文　氏（北海道大学観光学高等研究センター准教授）

冒頭、上田講師からサービスデザインの考え方等について講義いただきました。

・デザイン思考をビジネスに使用できるように発展させた手法である「サービスデザイン」は、使い手の気持ちになって物事を考える事が重要です。
・地域のお土産をデザインする上では、地域が有するシーズをもとにお土産を考えるのではなく、ユーザーの観察を行い、優れた体験を提供できるコトづくりの考え方が必要です。
・お土産は、贈る側贈られる側の双方で幸せを生む体験であり、地域での体験を語ることのできるツールとなります。

その後、デザイン思考の5つのステップ（共感、定義、創造、試作、検証）を通して、各水源地域のお土産について実践的に考えるグループワークを実施しました。

水の里PRフェア

中央合同庁舎3号館1階正面玄関脇スペースにおいて、水の里PRフェアを初開催しました。来訪者に対し水源地域における振興の取組みや観光資源、特産品等の紹介を通して水源地域の魅力の発信を行いました。

水の里 PR フェアの様子

講演

■持続可能な地域社会の実現に向けて SDGs 未来都市しもかわ：
蓑島豪 氏（北海道下川町政策推進課 SDGs 推進戦略室室長）

下川町は北海道の北部に位置し、約9割を森林が占めています。急激な人口減少を経て、1980年頃から住民主体の地域活性化活動が始まり、現在は町の方針である「持続可能な地域社会の実現」のため、森林総合産業を構築する「経済面」、エネルギー自給と低炭素化を目指す「環境面」及び超高齢化対応社会を構築する「社会面」の3側面の価値創造、統合的解決をコンセプトに、まちづくりを進めています。

循環型森林経営システムを構築するほか、FSC認証（Forest Stewardship Council：森林管理協議会）の木材生産やカーボンオフセットクレジット等、持続可能な森林の管理生産を行っています。バイオマス熱供給システムを中心とした「一の橋バイオビレッジ」では集落再生の取組みを行っており、徒歩エリアに住民センターや地域食堂等を設けるほか、特用林産物栽培研究所を設置し、年商約6千万円の収益と約 20 名の雇用を生み出している。生産年齢世代の移住、起業も多く、平成21年に51.6%だった高齢化率は平成28年には27.6%となっています。

まちづくりに SDGs を取り入れた「2030 年における下川町のありたい姿」として7つの目標を作りました。地域ステークホルダー（住民）が中心となり作った点、総合計画の将来像に位置づけている点、指標を設けて「見える化」する点、町内外の多様な人々が連携する点が特徴であり、現在は、バックキャスティングで実現に向けた計画づくりを行っているところです。更なる拡大のため、拠点となる「しもかわ SDGs パートナーシップセンター」設立を予定しています。

■地方創生に向けた SDGs の推進について：
遠藤健太郎 氏（内閣府地方創生推進事務局 参事官）

SDGs は、平成 27 年9月の国連サミットにおいて全会一致で採択された、「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のための、2030 年を年限とする 17 の国際目標である（その下に 169 のターゲット、232 の指標）。「普遍性」「包摂性」「参画型」「統合性」「透明性」という5つの特徴があります。

地方公共団体における SDGs 達成に向けた取組みの推進のため、内閣府では「モデル事例の構築」と「官民連携の促進」の2つの取組みを行っています。前者は「SDGs 未来都市・自治体 SDGs モデル事業」により、自治体による SDGs の達成に向けた優れた取組みを提案する都市を「SDGs 未来都市」として選定し、そのうち特に先導的な取組みを「自治体 SDGs モデル事業」として選定している。後者は「地方創生 SDGs 官民連携プラットホーム」を立ち上げ、各自治体が抱える課題と民間企業・NPO 等が有する解決のためのノウハウとのマッチング支援、分科会の開催、普及促進の活動を行っています。地域課題の解決のための共通言語として SDGs を活用いただきたいです。

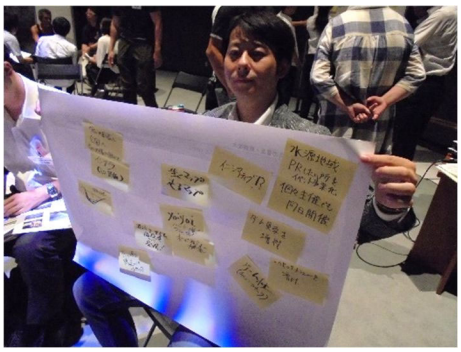
■令和元年度第1回水源地域支援ネットワーク会議（奈良県川上村）

集合写真

奈良県川上村では、吉野川紀の川流域の源流として、平成8年に「川上宣言」を発信し、都市にはない豊かな暮らしの実現と住み続けられる村を目指して総合的な戦略に取り組んでいます。

今回の会議では、川上村の地域資源の視察の他、森と水の源流館において「吉野川紀の川流域連携」の取組みの紹介と、川上村が水源地域振興において抱える課題について、村民を交え意見交換会を行いました。

〈ネットワーク会議 DATA〉
日時：令和元年9月26日～27日
場所：奈良県川上村
協力：川上村



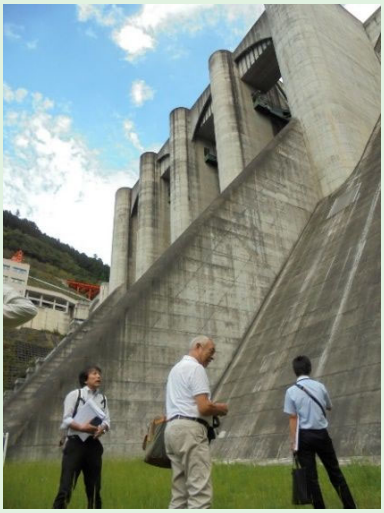
ワークショップの様子

ふれあいセンター前

現地見学

■大滝ダム・学べる防災ステーション

大滝ダムの役割や水と人の歴史などを楽しく学習する施設です。過去に起こった豪雨体験やパビリオンの見学などで、水の怖さ、治水対策、発電や河川環境の保護などについて訪れた人へ伝えています。



■大滝ダム

紀の川の洪水被害を最小限にくい止めるとともに、水道用水・工業用水の供給、発電及び紀の川下流の河川環境に配慮した河川水補給も行っています。

■丹生川上神社上社

大滝ダム建設事業に伴い、現在地に平成 10 年3月にご遷座となりました。祭典神事や村の催しなど一年を通じて、川上村民同士が交流できる場所となっています。

■匠の聚（たくみのむら）

匠の聚は様々なジャンルのアーティストたちがアトリエを構え、創作活動を行う芸術家村です。自由に利用できる作品展示ギャラリーやカフェ、陶芸や七宝などのアート体験ができる工房や宿泊コテージも備えています。

意見交換

柿の葉寿司の販路拡大・促進

A 班

・柿の葉寿司の生産能力の把握をする必要がある
・ファンを増やしたい
・川上村ならではの柿の葉寿司を広報したい
・味や伝統を守りたい

【川上村より】大事なことは地元が苦しくなりすぎない程度に頑張ること。そして適切な価値づけ、ブランディング化を行い、正しく世の中に広報していくことが大事であると痛感している。各事業者とともに広報面の強化を中心に取り組んでいきたい。

大滝ダムサイト及びおおたき龍神湖面の活用

B 班

・もっと湖面を活用したイベントに利用できるようにしたい
・周辺設備や環境を利用したアクティビティ（ボルダリング、SUPヨガ、トライアスロン等）ができるようになりたい。
・下流から見るダムは大迫力！
・夕日が見えにくい村だが、夕景や月の光を映した湖面がきれい。

【川上村より】人的資源（活動する人）、自然資源（きれいなダム湖）、人工資源（大滝ダム）、社会資源（アクティビティを通したコミュニティ）を複合的に活用し、ダム周辺の活性化につなげていきたい。今回のアイデアを含めて検討し、まずできることは実施をしていきたい。

現地見学

■吉野川紀の川における真の流域連携とは：尾上忠大　氏（公益財団法人　吉野川紀の川源流物語事務局長）

川上村は、新しい森と水を守る仕組みづくりの創出と、水源地としてその責任を積極的に果たしていくことを掲げた「川上宣言」を具現化するため、村が原生林を買収、740ha を保全しています。

紀の川下流地域である和歌山県との交流のひとつに「紀の川じるしの ESD」という研修会を実施しています。和歌山県・奈良県内の先生が「水のつながりをどのように授業に活かしているのか」について体験の共有と意見交換を行い、教室で生徒に対して行う授業をどのようなものにしていくか、定期的に集まって考えています。ESD の視点を新たに加え、現在は「地域資源の教材化」に着目して取り組んでいます。ESD とは、当事者意識を育てる参加型学習であり、地域住民・児童生徒が地域の良さを見つける学習、地域の課題を見出す学習、地域の課題を解決する方策の模索を位置付けていますが、学校と地域をつなぐことによって地域の大人や行政職員が地域を見直すきっかけになると考えています。

平成 30 年度版の環境白書に流域圏の連携として「紀の川じるし」が記載されました。「紀の川じるし」は、吉野川紀の川の流域をひとつの“商店街”に見立て、地域を元気にして水源の森を守り、流域の環境を守る意識を広めるために立ち上げました。源流から海までの流域で密に連携し、流域の人々が水のつながりについて考え、川上宣言の「川上における自然とのつきあいが、地球環境に対する人類の働きかけの、すばらしい見本になるよう努めます」という目標に一歩近づいています。

■住民の日々の暮らしを支えます：三宅正記　氏（一般社団法人　かわかみらいふ事務局長）、吉田政己　氏（一般社団法人かわかみらいふ事業推進課長）

奈良県川上村は、高齢化率は 57.4％の村であり、2045 年への人口減少率が大きい市町村の1位になりました。商店もなくなってきており、生活に不便が生じ、転出が増えるという流れになっています。

今住んでいる住民が、住み続けられるよう今ある暮らしの維持、健康で安心な毎日を送れるような対策が必要ということで地域運営組織が設立されました。「かわかみらいふ」の主な事業は、移動スーパー、ならコープの商品を各家庭まで届ける宅配事業、川上村唯一のガソリンスタンドの経営を行っています。

移動スーパー及びならコープの宅配事業は、「かわかみらいふ」にとっては雇用創出・販売ロスやリスクがない方法である一方、スーパー及びならコープにとっては配達効率の悪い地域を配達してもらえたり、人件費や燃料代等を抑えられたりと、双方にとってメリットのある仕組みで行っています。

「かわかみらいふ」の目的は、村民への声掛け見守り、コミュニティづくりです。移動スーパーは一週間で村内を回り、看護師も同行するため、住民と体調や生活についての話がしやすい関係を築いています。

活動事例①

●あざおね田んぼでの代掻きに集うよそ者・若者

あざおね社中
×
青根の未来を耕すよそ者・若者

SDGs 時代の関係人口　離れていても共に生きる

執筆者：あざおね社中　会長　村山　史世

水源地の生業・生活と生物多様性

青根の休耕田を復活させた水田を拠点に平成23年から活動を開始しています。稲作・畑作を行いながら、里地、里山の生物多様性の把握、自然体験活動・※1ESD、環境まちづくりを麻布大学の学生と教員、市民で行っています。田んぼのオーナーをはじめ、青根の地元住民と真面目に向き合い、楽しく生活を共に過ごすことを心がけています。相模原市立博物館や青根小学校、企業などとも連携しています。

環境省の「※2モニタリングサイト1000里地調査」のサイトとして、アカガエルやカヤネズミ、水環境や開発の影響などをモニタリング調査しています。国連生物多様性の10年日本委員会認定連携事業にも選ばれました。

「全国わがまちCMコンテスト2014・2015」では2年連続で青根のCMが最優秀賞を受賞しました。新聞等での掲載が多数あります。国立研究開発法人科学技術振興機構や神奈川県のSDGs事例集に優良事例として掲載されました。

あざおね社中は、平成30年、麻布大学「命の博物館」での青根の企画展をきっかけに、青根の生業・生活にも深く関わるようになりました。

※1：ESD（Educaion for Sustainable Development ）：持続可能な開発の教育
※2：動植物の生息状況などを 100 年にわたって同じ方法で調べ続けるサイト（調査地点）を全国に 1000 ヶ所程度設置し、日本の自然環境の変化を調査するプロジェクト

あざおね社中は、休耕地を復活させて水田耕作を継続的に行うために、学生・教員・市民でグループを結成しました。名称の由来は「あざぶ」＋「あおね」で「あざおね」、そして志を同じとする人々という意味で「社中」をつけました。

【活動内容】

飲水思源　離れていても共に生きる

青根に来る学生たちは自分たちの興味関心を持ってやってきます。それは自然だったり、生き物だったり、農作業だったり、土木作業だったり。お年寄りや子どもたちとの触れ合いを求めて来る場合もあります。

青根に通うと、若者たちは地域の課題に気づきます。課題の構造に気づく、水源地域の窮状に気づく、そして、青根に深く関わり始めます。

それは環境活動では片づけられません。地域づくりでも片づけられません。地域と人に深く関わることは一緒に生きることです。私たちは青根と離れていても共に生きています。

平成28年4月、青根小学校が焼失しました。令和2年3月には相模原市立初の義務教育学校である「青和学園」に統合され、146年の歴史に幕を閉じました。平成30年7月の豪雨では土砂崩れで道路が寸断されました。令和元年10月の台風19号では上青根の家屋3棟と田畑が土石流に流され、キャンプ場が土砂に埋まりました。神之川キャンプ場の経営者が土砂に巻き込まれ命を落としています。あざおね田んぼのオーナーのおばあちゃんも避難所から帰ってきてから数日で体調を崩し、数日入院したあと生涯を閉じています。

私たちは神之川キャンプ場の経営者が地元のために働いたことを知っています。田んぼのおばあちゃんは口約束だけで田んぼを貸してくれました。生きてゆくために農業だけでなく、養蚕、機織り、炭俵作り、山菜を採るなどたくさんの生業で生きてきたことを知っています。水源地域の自然とともにある生業と生活で生きてきたことを教えてくれました。

学生は先輩や青根の人から何かを引き継ぎながら青根を生きて卒業します。そして新しい学生が入ってきます。この学生たちが、小さなイベントやささやかな事業を青根の人と始めています。それが課題解決になるかは分かりません。でも青根のための学生と地元住民の協働は始まりつつあります。

【活動地域の概要】神奈川県相模原市
関係人口として水源地域に関わる

「総務省の関係人口ポータルサイト」によると、「“関係人口”とは、移住した“定住人口”でもなく、観光に来た“交流人口”でもない、地域と多様に関わる人々を指す言葉です」とあります。

従来の中山間地域対策は、定住人口の増加を目指してました。しかし、中山間地域の生業で稼ぐことが難しければ、定住は難しいです。また人口減少社会の進行は中山間地域から始まっていきます。日本全国で人口が減少しているのに、青根だけ増加することはありえません。さらに、定住人口増加策は、「地域のことは地域で頑張る」というように、地域自治にとらわれています。地域の問題は地域だけでは解決出来ないから、多様な人、多様な地域とのネットワークを模索するという、外に向けて開かれた関係を志向すべきですが、されていません。

他方、交流人口は、結局は地元にお金を落とす消費者を呼び込むこと以上でも以下でもありません。特産品の消費者が増えることも良いのですが、都市部の消費者と地元の生産者は金と物の交換関係なので、ドライです。また、お金が落ちるだけでは、地域の課題をすべては解決できません。

関係人口は最近耳にするようになりましたが、あざおね社中は平成23年当時から「意味のある関係づくり」という言葉をキーワードとしていました。

青根に住むことはできないし、消費者としてお客さんとしてお金を落とせない（学生は金ないです）。しかし、管理しきれない田んぼを一緒に管理したり、リンゴ園をお手伝いしたり、継続的に通ってお年寄りや子どもたちを喜ばせることは可能です。地元の人と一緒に笑ったり、泣いたりすることは可能です。

離れていても青根と共に生きる人。それが“関係人口”であり、あざおね社中です。

活動開始のきっかけは、平成22年に相模原・町田大学地域コンソーシアムの依頼でした。当時コンソーシアムが支援していた青根の森林体験教室をネタに、神奈川県の大学発・政策提案制度に提案をすることで申請者に指名され、その準備で初めて青根を訪問しました。政策提案制度ではファイナリストになりましたが落選しました。これっきりにするのが許せず、個人的に自費で森林体験教室に参加したり、学生と一緒に川の流れ体験などをやっていました。

平成23年の秋に、環境学習コンテストの賞金で1万円をもらいました。青根での環境学習の可能性を求めて、地元コーディネーターに会いに行き、やってみたいことをいくつか提案しました。その1つが棚田での自然観察会でした。

●川の流れ体験

●上：棚田
●下：水源林

コーディネーターが勝手に『麻布大学の村山講師が田んぼをやりたがっている』と勘違いして紹介してくれたのが、3年間田んぼを休ませていた田んぼのオーナーの佐藤さんでした。彼女が田んぼをやっても良いと言ってくれたので、環境科学科の学生に世界を少し変える経験をさせたくて、学生や知り合いの市民に呼び掛けて草刈りをした平成23年の11月23日、活動を継続するためにあざおね社中を始めました。当初は自分たちのための活動でしたが、活動を重ねていくうえで地域の課題や都市部との関係などにも気づくようになりました。

地元の人達は大学生を歓迎していると思います。大学生主催で交流会をしたときに、大学生のために炊事場を作ってくれたり、焼き芋窯を用意してくれたり、鹿肉、猪肉、鮎をふるまってくれました。夏は水をたくさんもらってきました。あざおね社中の代表がいないところで、地元住民と大学生が直接つながっています。

多くの学びは、それこそたくさんありました。特に、環境を学んでいる私たちにとっては、「水源地域の炭焼きや養蚕、稲作、畑作などの多様な土地利用を伴う生業や生活が、生態系の多様性、ひいては生物多様性を形づくっている」ことは経験を通して学べました。そして、生態系に配慮した環境まちづくりを今後も目指していきたいとの意欲を持てました。

【水源地域支援ネットワーク会議に参加して得られたもの】

水源地活性化の戦士と知り合えた

ある学会のシンポジウムで面識を得た国土交通省の水資源政策課の方に誘われて参加しました。当初は水源地域の地元住民ではない学生と教員と市民サークルが参加して良いのか？という躊躇いがありました。

参加してみて、宮ヶ瀬ダム周辺振興財団をはじめ水源地域の活性化のために戦っている多くの戦士たちと知り合えました。それは、あざおね社中では向かい合うことのない戦いをしている方たちでした。交流を通して、私たちには多くの学びがありました。

私たちは環境や生態系に関心があります。しかし、経済・社会の持続可能な発展なくしては、水源地域の持続可能性もなく、環境や生態系も維持できません。青根の持続可能性のために、このネットワークの末席に留まりたいです。

【今後の展望・PR】

青根を楽しく、持続可能に

今後も、私たちは青根に関わり続けます。楽しい事業を企画・実践して、青根の内外の人を喜ばせたいです。楽しいと思った人が増えれば、青根の“関係人口”は増えます。一緒に青根の未来に夢を描き、そのための行動指針を立案すれば、青根のアジェンダが出来ます。それを実施すればSDGsを足元から実現していけます。

青根を楽しく。小さくても持続可能に。水源地域支援ネットワークを活用しながら。

平成 23 年
青根に学生が来る

平成 24 年
水田耕作開始
青根小学校で授業
地域活性化交付金事業

平成 25 年
生物多様性の調査
環境省の ESD 事業

平成 26 年
全国わがまち CM コンテスト最優秀賞

平成 29 年
JST の SDGs事例集に掲載

平成 30 年
麻布大学いのちの博物館で青根の企画展

令和元年
学生が地元住民と協働事業

活動事例②

執筆者：木祖村役場産業振興課　商工観光係長　高柳　政次

●味噌川ダム

長野県木祖村
×
木曽川源流の里木祖村の地方創生

木曽川上下流交流事業と経済発展へ向けて

木曽川源流の里　木祖村はこんな村

木祖村は、流路延長２２９㎞木曽川の最上流に位置する自然豊かな山あいの村です。周囲を２，０００m級の山々に囲まれ、村の東側にある鳥居峠は太平洋に注ぐ木曽川と日本海に注ぐ信濃川（支流）の分水嶺となっています。村の中央部を木曽川が流れ、山には木々が茂るのどかな農村風景が広がる山村に、約２，８３０人（令和２年１月現在）の村民が暮らしています。

村内では「御嶽はくさい」や「とうもろこし」など高原ならではの味覚を楽しむことができ、伝統工芸品の「お六櫛」や全国約８０％の生産量を占める「キャンバス」等、農林業や木工業を中心とした産業が盛んです。また、「こだまの森キャンプ場」や「やぶはら高原スキー場」、「水木沢天然林」といった四季型観光資源も充実しております。

近年の少子高齢化や担い手不足により農地や山林の荒廃化、産業の停滞など大きな課題はありますが、村民一体となり豊かな自然景観や歴史文化、人の結びつきを活かした交流事業を展開しています。

【活動内容】

木曽川上下流交流事業と木祖村の地方創生

平成8年に味噌川ダムが竣工し、村民や関係機関などが中心となり「木曽川源流の里ビジョン」を策定しました。森林保全や水源涵養など下流域との相互理解のもと、教育文化、観光や産業など幅広い分野での交流を図ることで交流人口の増加、地域活性化を目標としました。ビジョン推進に向けた推進母体が組織され、全国の水源地域や源流域の自治体などで構成される「全国源流の郷協議会」への加盟も進められました。

平成20年には木祖村で「全国源流シンポジウム」を開催し、全国各地の源流同士の交流や情報共有を図ることで、水源地域の大切さや役割を知っていただくための重要性啓発活動や環境保全活動など、課題解決に向けて「住民が自発的に活動できるリーダー養成」や「下流域とのパートナーシップを図るための渉外活動」など積極的に取り組んできました。

●全国源流シンポジウムの様子

●東海地区　木祖村人会総会

【活動地域の特徴】長野県木祖村

木曽川上下流交流事業の推進

平成8年に味噌川ダムが竣工したことをきっかけに「これからが本当のダムづくりだ」を合言葉に木曽川の水を享受する下流域の皆さん、特に名古屋市や友好自治体提携を結んでいる日進市との上下流交流を積極的に推進してきました。

今では名古屋市、日進市のみならず愛知県、岐阜県、一宮市、尾張旭市、知多市、東海市、弥富市、三重県木曽岬町など多くの自治体との繋がりから物産イベントや展示会などに参加し、木祖村の特産品や観光PRによる経済交流活動を実施しております。また直接水資源に触れ合える魚つかみ体験や森林散策などの親子源流ツアーなども毎年受入れています。このような地道な活動から「木曽川の水を守ろう！」「水源地を理解しよう！」とのお気持ちを持った方々に情報が広がり、木曽川上下流交流事業は水に関わる企業や団体、個人の皆さんによる水源地域での植樹や育樹、緑化寄付活動等にも発展し、木曽川上下流交流事業から水資源の大切さや水源地域保全の重要性の普及活動が進められています。

平成20年、木曽川下流域との交流事業を円滑かつ積極的に進めることを目的に、名古屋市内に「木祖村名古屋出張所」、「木祖村アンテナショップ」を開設しました。出張所、アンテナショップが拠点となって商談会や物産展への参加が増え、自治体や民間企業との飛躍的なネットワークが構築され「木祖村の知名度向上」が進みました。更には東海地区在住の木祖村出身者などから組織される「東海地区木祖村人会」も発足し、下流域での物産イベント参加や情報発信などを担っていただき、故郷を思う気持ちが木祖村の大きな支援となっています。

また名古屋市内で水道事業を営む企業が中心となり、水源の森を守るとともに紅葉の名所にしようと村内に約2，000本のカエデの植樹や育樹活動「源流の里緑化交流事業」が今なお継続されています。

●上：名古屋出張所開設
●下：緑化事業

【水源地域支援ネットワーク会議に参加して得られたもの】

平成25年度から参加しました。当時の事例発表に木祖村も関わらせていただいた「全国うまいもの交流サロンなみへい」の取組みと、名古屋市上下水道局「木曽三川流域自治体連携」の取組みであったことが水源地域支援ネットワークへの参加のきっかけです。「なみへい」では平成25年8月の一ヶ月間、木祖村の食材を使ったメニューをお店で提供していただきました。名古屋市上下水道局の木曽三川流域連携には木曽川上流域の一員として木祖村も連携を図っております。私自身も発表者と連携事業に深く関わらせていただいた事から、その場で「木祖村」「木祖村」と名前を連呼され、初めての参加にも関わらず目立ってしまったかな、と少し恥ずかしい気持ちになったことを思い出します（笑）

源流と水源地域の違いは何だろう？と疑問に思っていましたが、源流＝水の流れの源、水源地域＝水の源がある地域、と今なら自信を持って言えます。一緒のようで少しニュアンスが違う言葉ですが、私たちの生活にはどちらも欠かすことができないものであり、そういった気持ちを持たせてくれたのが『水源地域支援ネットワーク会議』だと思っております。

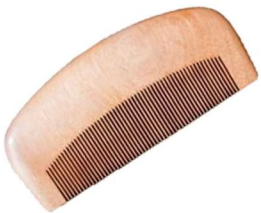
これまで開催されたネットワーク会議では全国各地の水源地域の取組みを見聞し、エネルギッシュな活動や人々の思いに刺激をもらいながら、自分自身の次なる活動の指標にしてきました。また講演会等では、人を引き付けるための「イベントチラシの作り方」、消費者の観点から考える「アンテナショップ運営」、「サービスデザイン手法」など即実践に結び付けられる情報を得られました。

水源地域で生活する者として「水循環とその価値」を改めて考え直すことができた場が水源地域支援ネットワーク会議であり、このネットワークは生涯大切にしたいと思っています。

上流にあって下流に無いもの、下流にあって上流に無いものがあります。上流には豊かな自然環境があふれ、川魚や野菜、手の込んだ加工品（特産品）があります。下流には経済循環できる人材や場所が多くあり、自然景観を求める方も多くいます。お互いに無いものを求めながらの経済交流が育まれているものの、ニーズの多様化や村内生産者など関係者の高齢化による需要と供給のアンバランスによる大きな課題も浮き彫りとなり、なかなか村内一円に経済効果が表れないのが現状です。本当に上下流交流が木祖村に必要なのか、その答えは平成29年10月設立の一般社団法人木祖村観光協会が握ることとなりました。アンテナショップ運営や物産イベント、専門的な観光宣伝活動など行政の交流事業を受け継ぎ、観光協会員にいかにメリットをもたらすか。試行錯誤しながら、地に足を付けながらではありますが、これまでの人と人の交流の絆を大切に、信頼関係を築きながら経済交流から水源地域活性化に向けて取り組んでいます！

●上：なごや水フェスタの様子

●下：アンテナショップ内装



【今後の展望・PR】

交流を通して見えてくるもの

味噌川ダム建設計画から約半世紀が経過し、竣工から木曽川上下流交流事業まで発展してきた先人の並々ならぬ努力があります。これまで培ってきた交流の絆は人と人の信頼関係で結びついてきた結果です。木祖村が進めている「移住促進」「企業誘致と雇用促進」に向け、新たなビジネスや特産品のブランド化、販路拡大には信頼関係で結ばれた木曽川上下流交流事業の推進が不可欠であり、先人の努力を後世に繋げていくことが水源地域の景観保全や経済循環の基となると信じています。

一般社団法人木祖村観光協会を中心に、木祖村アンテナショップ運営などから経済効果向上に向け、地域住民自らが「稼ぐ力」を身に付けるとともに観光入込客数や観光消費額の増を目指し、木祖村らしい観光地経営の目線で取り組んでおります。

ニーズの把握とともに水源地域らしい特産品開発や販路拡大も視野に入れ、その活動がやがて流域全体の繁栄をもたらすことを信じて…人と人、モノとモノ、気持ちと絆を表している交流を通じた地域の経済発展に向け、木曽川の流れが続く限り終わりのない木曽川上下流交流事業を展開していきたいと思います。

執筆者裏話（笑）…写真にある木祖村アンテナショップの内装（木板）は木曽産ヒノキやサワラです。改装当時執筆者自ら運搬し、トラックから人力で荷下ろしをしました。私の血と汗と涙の結晶である愛着あるアンテナショップ。名古屋へお越しの際はぜひお立ち寄りください♪
名古屋市昭和区桜山6－104－37
（市営地下鉄桜通線　桜山駅すぐ）

活動事例③

●2019.10.13　新竹取物語～収穫祭～　芋掘り体験“大きなさつまいもがとれたよ！焼き芋、天ぷらにしておいしかったよ！”

湖西夢（こせいゆめ）ふるさとワイワイ倶楽部
×
琵琶湖里山の自然や資源を大切に、環境保全に努めましょう
あるもの探しで、自然・歴史・生活文化を五感で楽しみましょう

歓交は造語です。歓は近江商人（高島商人）の三方よし、交は交流を意味します。

歓交で地域づくりの循環

滋賀県から高島郡に、『地域交流創出事業をしませんか。』とのお話しがあり、平成11年4月、湖西6町村の産官民が、ウォーキング事業のため、湖西夢ふるさとワイワイ倶楽部実行委員会を発足させました。

「ファン倶楽部」を作り、初年度は197名の会員が入会、現在は450名です。活動内容は、トレキング・歴史ハイキング・自然観察などです。平成23年からスノーシュートレッキングも実施しています。登山道の整備や塞がった古道を観光コースに復活させました。安曇川沿いをご案内の時、『どうして荒廃のままなのですか。』と聞かれ、恥ずかしかったです。子供の頃、竹藪や川で、友達と魚掴みなど楽しみ、整備すれば綺麗になるのになぁ・・と思いました。平成18年、市民団体の交流会で、竹林整備活動のお話しを聞き、滋賀県土木事務所にお願いに行きました。平成19年7月竹林整備部門を設立、安曇川町川島区の荒廃した竹林を借用しました。竹林整備体験をエコツアープログラム化した「新竹取物語」を創出しました。内容は、竹林整備・竹工作・竹遊具遊び・山菜天ぷら・カブトムシの観察・平成24年から、荒地や休耕畑を整備し食育活動や自然観察に利用・餅つき体験・川魚料理・地元の食材を使った料理（高島名物しょいめし・竹釜飯など）ノミ・金槌を使って竹釜飯の釜割り体験は好評で、あま～い香りがします。羽釜で炊いたご飯と食べ比べます。

執筆者：湖西夢ふるさとワイワイ倶楽部
会長　阿部　和子

新聞・テレビなどでご紹介いただき、子どもから高齢者まで幅広い参加があります。地元の観光協会様や宿泊施設様の教育旅行・企業研修を受け入れています。令和元年10月、河川改修のため、安曇川町青柳の竹林に会場変更しました。

平成24年、水源地域支援ネットワーク会議に出席しました。平成25年度から自主運営、針畑活性化組合協力事業を開始しています。令和2年度（公益）びわ湖高島観光協会様の戦国体験型ツーリズム事業に協力しました。

15年ほど前に、京都精華大学の嘉田由紀子先生から、『無いものねだりではなく、あるもの探し、あるものを活かしましょう。それぞれの地域にある価値を見直し、自らが地域の魅力を発見していく中から誇りを持てる地域を築いてください。』と、ご講演があり、『お金がなくてもできるんだ。』

と、衝撃的な事でした。

“あるもの探しで高島市の自然・歴史・生活文化を五感で楽しみましょう”という理念の元、環境保全活動と地域活性化を両輪に活動中です。

私たちの一番誇れる活動は、あるもの探しで、荒廃した竹林に気付き、磨き、新竹取物語を創出したことです。竹林整備で景観は良くなり、コンクリートのように固い地面はフサフサになり、カブトムシが繁殖、山野草が自生など、自然再生について学習できる場に価値が向上しました。自然は少し手を加えると素晴らしく蘇ることを学習しました。この活動で平成27年1月「手づくり郷土賞」を、平成27年3月には「日本自然保護大賞」を受賞しました。

平成28年度第11回エコツーリズム大賞優秀賞を受賞しました。

地域の方々のやさしく心温まるおもてなしに触れ、地域の方々の交流が何より大切な観光資源だと感じています。また、単に観るだけでなく、五感で楽しめます。例えば、イワナシの実やナツハゼの実なども実際に味わい、「実は固いね」「ナツハゼの実は真っ黒になった方が甘いね」などの感想。ホコリタケの場合は、触れてホコリが出るのを観察。このように、自然界や日常にあるもの（探し）を五感で楽しみます。某TVの取材時、京都のKさんは、『急ぐツアーはたくさんありますが、気持ち良いのでこの辺りで休憩しましょう。お花が綺麗なので、景色の良い所で、ゆっくりお写真を撮ってくださいね。植物の観察や景色を楽しむ時間をとって下さる。この会の良い所ですね。他にはないですね。』と答えてくださいました。このようなことから、歓交にこだわり、地域が少しずつ良くなるよう活動中です。

●郷土料理“ゆるぎ蕪のぬか漬け”体験

●トレッキングでホコリタケの観察

●竹弓つくり　お土産に

【活動地域の特徴】滋賀県高島市

歴史の宝庫高島市

高島市は、古来より京都・奈良の都を結ぶ交通の要衝（西近江路や若狭街道（鯖街道））で、湖上交通の拠点である港町や宿場町で栄えました。琵琶湖は400 万年の歴史を持つ古代湖で、近畿 1,450 万人の生活と産業を育み癒しの場で、私たちの誇りです。当市の奥山から注ぐ水量は、琵琶湖全体の 38%。「水」と「人」が深い関わりを持ち生まれた生活文化、気候・風土と知恵が作り出した発酵文化など固有の食があります。

地場産業である扇骨（扇子の骨）は全国シェア 90%を誇ります。高島扇骨（たかしませんこつ）の多くは京都へ出荷され、絵付けされた紙が貼られ京扇子として販売されます。実は国産の扇骨（竹製）のほとんどが高島市で作られています。近年、地元でも和紙を貼り、「近江扇子」として仕上げ販売していますが、原材料を輸入に頼り、竹林は荒廃していました。

●芋掘り

●竹林で流しソーメン

【活動内容】

水と緑　人の行き交う高島市

私たちの活動方針は、琵琶湖を中心ということで、笑湖（エコ）活動と名付けで活動しています。水源地域の人と来訪者が共に琵琶湖の環境について考え交流することにより、人の思いが育まれ、笑湖活動を次の世代の方が引き継いでくれると考え活動しています。日常生活を歓交資源とし、自然や歴史・生活文化を五感で楽しみます。景観保持・危険防止のため、事前に登山道の整備など20年以上実施しています。滋賀県・高島郡（市）など主催の研修会に積極的に参加し、資格も積極的に取得しました。現在、笑湖ツアーは、NACS—J自然観察指導者・管理栄養士・エコツーリズム指導者・環境学習指導者の資格を有した者が中心になり計画・実施しています。企業でTQC活動の経験者がいて、事業展開は、PDCAサイクル（Plan（計画）→Do（実施）→Check（評価）→Act（改善））を回し、一年ごとに良くなるよう積み重ねています。当初、大きな補助金事業で、このままでは継続は無理と考え、現状調査からテーマを決め、特性要因図を示し、PDCAサイクルを回し、改善を重ねています。①先ず大きかったのは人件費。事務の簡素化・書式の改善。②社会の変化・環境負荷の軽減のため、小人数の着地型歓交。③阿弥陀山ハイキングコースの開拓で教育旅行や企業研修受け入れ。④参加者・スタッフの高齢化と家族参加の取組みとして新竹取物語を創出、教育旅行・企業研修など受け入れ。⑤河川改修に伴い新竹取物語の会場変更。⑥当会継続の危機。いずれの解決にも、特性要因図から解決策を見出し、PDCAサイクルを回し事業を継続、活動は21年目です。

【水源地域支援ネットワーク会議に参加して得られたもの】

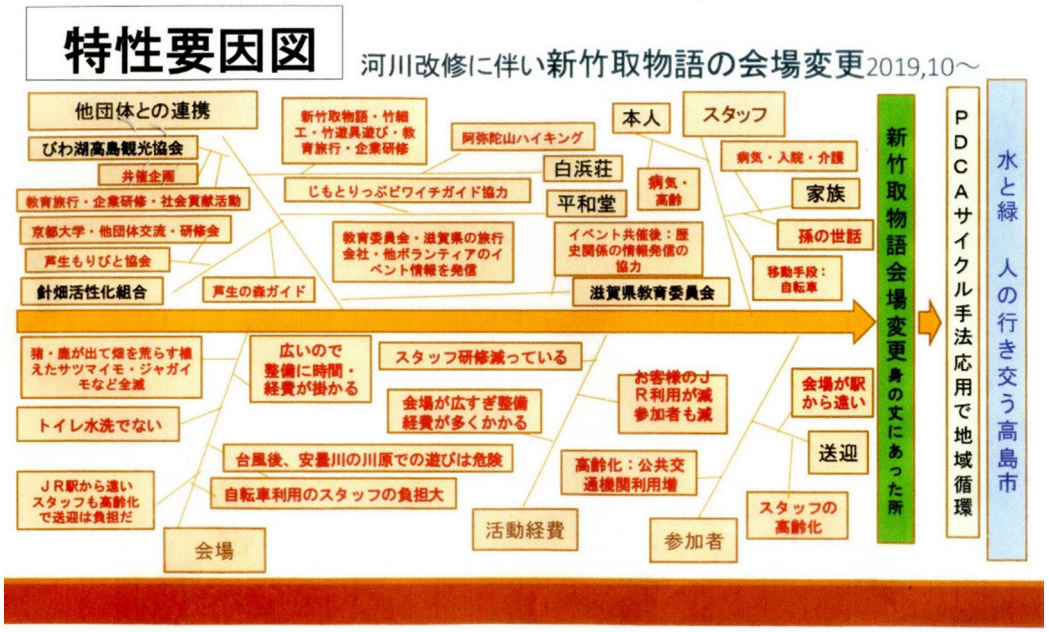
ワイワイ倶楽部のさらなる進歩を求めて

“水のめぐみ”とふれあう水の里のコンテスト 2011 で優秀賞受賞をご縁に、水源地域支援ネットワーク会議に参加しました。

和歌山大学の大澤健先生のご講演は、私たちの活動の振り返りや進め方の参考になりました。このネットワーク会議は、幅広い分野からのご講演やワークショップなど多彩です。取組内容が違う場合はとても緊張します。でも新しい気付きやヒントがたくさんあります。どんなに精工なネジでもアソビ（余裕）があります。この小さなアソビの中から参考になることをつかみ取る、絶対何かを持ち帰るのだという意気込みで臨んでいます。ネットワーク会議への出席で、大きなことに挑戦するチャンスに出会え、「手づくり郷土賞」・第4回「ジャパン・ツーリズム・アワード」にも挑戦し入賞しました。新聞や高島市の広報誌にご紹介くださり、私たちの大きな励みになりました。また、平成29 年度水源地域ネットワーク会議を高島市で開催してくださり、多くの市民団体が参加、ポスターセッションなどの活動紹介や交流を深めていただき、地域のみなさんの大きな誇りになったことと思います。

【事例紹介】新竹取物語の会場変更についての考察

ここで、令和元年10月からの新竹取物語の会場変更について考察（事例紹介）します。現状調査の要因図から、活動背景を確認し、活動テーマの要因分析・問題点を図のように表し、特性要因図を描きます。



1.対策を考えます

- 対策① 会場は、現在より小さく
- 対策② JR安曇川駅に近い所
- 対策③ スタッフの高齢化に配慮
- 対策④ トイレの問題を解決したい

2.会場探しをします（1.に合うような会場を探します）

- A：お世話になっている宿泊施設さまのご紹介
- B：竹林整備をされているグループの紹介
- C：JR安曇川駅から13分の所の竹藪A, B, Cの3か所が候補にあがりました。
- 実際に、現地を見学。対策①②③④を解決する所を探します。今回は、Cです。次に、地主さんやご近所のご了解を得ます。
- ① スタッフ数人で、地主さんにお願いに行きました。快く貸してくださいました。
- ② ご近所さんに、説明にまわり、ご了解いただきました。
- ③ 竹林整備を始めました。

3.イベント実施

- A：令和元年10月13日
- 新竹取物語収穫祭を実施。
- 2歳から84歳までの方が楽しみました。
- B：令和元年12月15日
- 新竹取物語冬の祭典を実施。

4.効果

- ① 駅から近いので好評
- ② 近くに道の駅「藤樹の里あどがわ」がある
- ③ 空家利用で、トイレは水洗
- ④ 冷蔵庫が利用できるのでメニューも豊富になる
- ⑤ 川遊びが安全にできる

5.新しい課題・次の課題へ

- T・Q・Cは、Total Quality Controlの略で、主に製造業で、品質管理の取組みです。長年会社にお世話になり、T・Q・C活動でいろんなテーマに挑戦しています。これは優れもので、いろいろ応用できます。福祉施設の管理栄養士の立場から、入所者さんの肥満対策に利用しています。特性要因図を描くことで、今まで積み上げてきたものが活かせ、新しい気づきや新たな可能性に気づき、活動はドンドン進みます。いくつかの課題を同時進行する場合もあります。全体の背景を掴むための現状調査にも特性要因図を使います。

【今後の展望・PR】水と緑と人を大切に、歴史の宝庫高島市をPR

笑湖活動は、あるもの探しでゴミの山を磨き、景観保持や自然観察だけでなく自然再生を学ぶという宝に変身する物語です。刈った草や腐った竹などは、土に変わり、肥料にもなり、ゴミ減量にもなります。自然が循環し、人の心が循環し、お金も循環する。人と自然の積極的な関わりによって生まれる感動の連鎖を次世代につなげば、環境と経済の好循環の一つになります。今、NHKの大河ドラマ「麒麟がくる」で明智光秀が話題になっています。高島市田中城など、オンリーワンを掘り起こし中です。

今後もPDCAサイクルを回し、水と緑と人を大切に、歴史の宝庫高島市をPRします。

（「水と緑　人のいきかう高島市」は、高島市新市建設計画における、将来目標像です。第2次高島市総合計画2017から2026年度の基本構想将来目標像「水と緑　人のいきかう高島市」に向けてとあります。長い間、たくさんの補助金を頂いていました。）

活動事例④

●平成 24 年3月に完成した斐伊川上流の雲南市と奥出雲町にまたがり建設された国土交通省直轄の尾原ダム

特定非営利活動法人さくらおろち
×
つなげよう、育てよう、活かそう“さくらおろち湖”

執筆者：特定非営利活動法人さくらおろち　事務局

尾原ダム周辺の地域活性化

（斐伊川流域の上下流交流）

尾原ダム周辺地域並びに斐伊川流域住民に対して、ボート競技、自転車競技、トライアスロン大会などのスポーツイベントなど様々な事業を実施し、上下流域の相互交流を図るとともに積極的に地域の情報を発信し、地域の活性化と自然環境の保全に寄与することを目的とした活動を行っている団体です。

●雲南市の花：さくら、斐伊川が舞台である「八俣のオロチ退治」伝説の「おろち」にちなんでさくらおろち湖の名称となりました

【活動の内容】

水源地域を結び、拓く

企業・住民・団体・行政との連携で、毎年7月・9月に「森と湖に親しむ旬間」や飯南町の志津見ダムと連携して取り組む「水の縁推進事業」などに合わせた尾原ダム周辺の環境美化活動（企業CSR）を実施しています。尾原ダム周辺の企業や斐伊川の下流域の松江市なども含め毎年200名以上が参加しています。

流域企業には尾原ダム建設に関係した企業が多く、尾原ダムに親近感を抱いていただいています。また、斐伊川流域の水資源確保の観点から水に絡む企業・団体や労働組合等の協力があり、毎年多くの参加者があります。（令和元年度は10回以上参加企業を表彰：表彰企業10社）

●斐伊川流域の企業・団体によるさくらおろち湖周辺の環境美化活動を目的に、毎年7・9月実施しています

流域圏の恵みの源を守り、育む

□森林の整備・管理

尾原ダムの周辺の竹や雑木林や雑草などの伐採や植樹などを管理しています。

景観保全を目的に、毎年七夕の季節に、尾原ダム近隣の保育園や幼稚園に笹などをプレゼントしています。また、殺伐とした雑木林を伐開し、そこへ紅葉や桜を近隣の住民や小学生を招いて、植樹を行っています。

□ビューポイントの発掘・活用

ビューポイントの発掘を目的に、魅力あふれるさくらおろち湖周辺の写真を募集し、今年で5回目の「さくらおろち湖写真コンテスト」を開催しました。尾原ダム周辺の写真撮影ポイントの発掘や、ダム来訪者の増加にも繋がっています。また、5回のコンテストで蓄積された写真でのカレンダー作成を検討しています。

さくらおろちの魅力を磨き、活かす

□尾原ダムの魅力発掘

尾原ダムでは毎年3月第1土曜日、年1回のクレストゲート点検放流に併せて「クレスト放流イベント」を実施、地域に春の訪れを知らせる風物詩となっています。

クレスト放流イベントは年々参加者が増加、さくらおろち周辺イベントの核となっており、迫力ある放流風景は写真撮影ポイントとして定着しています。

□歴史残る舞台や、今ある環境を活かしたスポーツイベント

古事記の舞台となった街道や、昔から残っている登山道をいかしたトレイルランニングレースやロゲイニング大会を実施しています。

ダム竣工で出た残土処理場を活かして、ランニングバイクの特設会場や、さくらおろち湖や周辺の道路を活用したトライアスロン大会などの、コース整備や共同運営を行っています。

□斐伊川上下流交流

斐伊川の上下流交流を行うため、さくらおろち湖まつりやそば打ち体験、夏休みの尾原ダム・さくらおろち湖探検ツアーなど斐伊川周辺の住民と上流部の住民との交流の場を企画しています。

●尾原ダム周辺で9月に実施しているトライアスロン大会

□情報発信

さくらおろち湖周辺施設で開催されるイベントや季節に応じての情報を、常にHPやFaceBookで掲載し情報発信を行っています。

【活動地域の特徴】島根県雲南市 尾原ダム周辺地域

活動地域である尾原ダム周辺は、さくらおろち湖があり、宍道湖にそそぐ斐伊川の上流部に位置し、島根県の雲南市と奥出雲町にまたがる、尾原ダムによってできたダム湖になります。

また、この地域では尾原ダム建設に当たり、旧仁多町と旧木次町において 111 戸の移転家屋がありました。現在では、少子高齢化が進み、人口減少が進んでいる過疎地となっています。

【活動の成果】

環境保全活動、観光レクリエーション活動、情報発信

さくらおろち湖周辺で開催するイベントや環境美化活動、スポーツなどで訪れる人が、年々増加しています。また、さくらおろち湖周辺では、牛や馬の牧場、温泉施設、宿泊施設や博物館、地元野菜の販売やレストランがある道の駅など施設があり、さくらおろち湖に訪れる人がこれら、関連施設を利用し統計を取り始めた平成25年は、約98，000人でしたが平成30年度では約141，000人が年間訪れるようになりました。

尾原ダム周辺の来訪者数については、毎月周辺施設(尾原ダム、道の駅おろちの里、奥出雲長者の湯、奥出雲多根自然博物館など)からの来訪者数をNPOさくらおろちに報告し、集計しています。

【活動にあたっての苦労話】

人手不足(高齢化)

活動を実施するにあったて、近隣住民や活動団体に協力を求めるが、人手不足だったり高齢化が進み、毎年お願いしていたことが出来なくなったりすることが出てくるようになりました。

尾原ダム周辺で実施しているイベントは○実行委員会ごとに実施しており、少子高齢化が進んでいる地域では大きな課題と言えます。地域の中学校・高校生等のボランティアの確保や、地域住民への働きが必要になります。

今後は、地域の中学校・高校生を地域イベント(自転車・ボート競技やカヌー、写真コンテスト等)へ参加を増やす中で、尾原ダムの活動・魅力について周知を図っていきます。

●尾原ダムの年間利用を目的に宍道湖の7珍味である「ワカサギ」の育成をダム湖で取り組んでいます。また、平成30年度には「日本釣り用品工業会」からワカサギ卵孵化装置一式の寄贈を受けワカサギ釣り場整備を行っています。成果はこれから･･･

【水源地域支援ネットワーク会議に参加して得られたもの】

全国の水源地域において活動している団体との情報交換

水源地域において活動している団体と同じ悩みや先進的活動についての情報交換の場となっており、有意義な時間です。尾原ダムにおいて活動している内容を全国に情報発信する場にもなっています。

【今後の展望・PR】

さくらおろち湖でワカサギ釣り

さくらおろち湖の新たな利用者を増やすために、ワカサギの育成を目的としたさくらおろち湖ワカサギ育成活動推進協議会を設立しました。

委員のメンバーとして斐伊川漁業協同組合・地元団体・地元住民および島根県水産技術センター、尾原ダム管理支所、島根県雲南県土、雲南市、奥出雲町をオブザーバーとし、平成 31 年の4月、5月に一般社団法人日本釣り用品工業会よりワカサギ卵孵化装置の寄贈をうけ、卵 700 万粒を孵化させ放流し、冬にワカサギの調査を行います。

また、11月にさくらおろち湖ネットワーク会議があり、さくらおろち湖周辺で活動する団体および行政間でワカサギ釣りの活用方法について協議を行い、ワカサギ料理の提供や釣り講習会、ツアーの協力などの提案がありました。

今後、ワカサギが成長し、さくらおろち湖でワカサギの自然繁殖ができるようになり、安定した釣果が可能となれば、冬季間の観光資源の創出とワカサギ料理の開発など尾原ダム周辺の地域振興にもつながります。

活動事例⑤

執筆者：エコ・グリーンツーリズム水の里しらやま
森　和恵

●おとなだって遊びたい、おとなのザリガニ釣り大会

エコ・グリーンツーリズム　水の里しらやま
×
越前しらやまのおもてなし

人も生き物も、しあわせに出会う里

しあわせの里　越前しらやま

「しらやま振興会　里地里山部」の10年間の活動を継承して、平成27年3月【水の里しらやま】（会員54名）を設立しました。コウノトリの棲む白山地区内に存在する、美しい自然・伝統文化・伝統産業や多様な農林業生産活動を活かした、農山村滞在型余暇活動の推進を通し、地域の農林業や伝統産業の振興と活性化を図ることを目指しています。

【活動内容】

きてみてきっと好きになる、しらやま

白山地区の豊かな自然環境と歴史・文化を守り続け、持続可能な集落づくりを進めていく上で、都市住民との交流による保全活動や販路拡大などは、地域活性化のために不可欠です。そこで、田舎ならではの農業体験や自然体験ができる農家民宿などを通して、都市住民との通年的な交流を図り、地域の活性化に繋がるように、エコグリーンツーリズムに取り組むことになりました。

「廃校になった小学校分校・おいしい湧水・ホタルの乱舞・星空・滝・甘いスイカ・コウノトリ」等、改めて地域を見直せば、豊富な地域資源があります。それを生かした旅ツアーの企画を始めました。その結果「源流の里で出会うコウノトリと森のおいしい水」では「水の里の旅コンテスト2012」で奨励賞を受賞しました。翌年には、「越前しらやま発五感で感じる！ほたるの里の【ほたるカフェ】」で最優秀賞を受賞することができました。マスコミで紹介されるようになると、地域の人もあまり知らない滝を整備したいという動きも出てきました。瞬く間に整備し、遊歩道や展望台スペースを確保し、大きな看板や案内板まで仕上げました。今では「勝蓮華の滝」として地区内外の人からも愛される名所となっています。

●勝蓮花の滝

【活動の成果】
ゆったり、たっぷり、しらやま時間

廃校を活用した「ほたるカフェ」は、6月ホタルの季節に土曜日だけの期間限定で開催し、7年目が経過しました。ホタルを求め毎年約1，000人が訪れ、ホタルがでるまでの時間を勝蓮華の滝やコウノトリ見学など、地区内を回遊する来訪者も増えてきています。

タイムスリップしたかのような古き良き日本の原風景が残るしらやま地区を訪れるのは、年配者に限らず、若い家族連れやカップルも多いです。生き物や土に触れ、自然の中でのびのびと、ありのままの白山を好きになってもらいたいです。

【活動にあたっての苦労話】
地元プラス関係者で地域おこし

「ほたるカフェ」の運営を、当初は地域の人を主役にする事に執着した結果、PR不足と地区内のイベント感が強く、本来目指す地区外の集客には繋がらず、来客数は伸び悩みました。

懐かしい校舎で給食を！ホタルの見える時間帯の営業を！と内容を検討し、現職の学校調理員の協力やアコースティックライブの開催、教室を使ったワークショップなど、外部関係者の協力も得て内容を一新！関係者が増えたことで、来客数も来客層も激変！みんなが当事者となって会場を盛り上げ、SNSなどで情報を発信してくれるようになり、「まずは、しらやまへ来てもらいたい！」という最初の目的を達成することができました。

【活動地域の特徴】
コウノトリの棲む里地里山

きれいな水と豊かな自然の象徴である「蛍」が多く飛び交い、アベサンショウウオなどの多くの希少野生生物が生息するしらやま地区は、人口 1,600 人・世帯数 540 世帯の小さな里地里山です。全国有数の「里地里山保全再生モデル事業」に指定され、日本の里山百選にも選ばれているなど、懐かしい日本の原風景が保全されている地域です。

近年は、生態系の頂点であるコウノトリをキーワードとした環境調和型農業*1 にも取り組み、人も生き物も幸せに暮らせる地域づくりを目指しています。

コウノトリが姿を消したのは、田んぼに農薬が使われるようになって、餌になるカエルや土壌などの生き物が減ったからだと言われています。しらやま地区では「コウノトリを呼び戻す農違法部会」が化学肥料を使わない環境調和型農業の取組みを始めました。きれいな水と豊かな自然の象徴である「蛍」が多く飛び交い、アベサンショウウオなどの多くの希少野生生物が生息するしらやま地区は、全国有数の「里地里山保全再生モデル事業」の実施地域に指定され、日本の里山 100 選にも選ばれているなど、懐かしい日本の原風景が保全されている地域です。

生態系の頂点であるコウノトリが、安心して餌を食べる水田にはたくさんの命が育まれています。現在では、コウノトリは飼育ケージに2羽、そして今年は野外コウノトリに4羽のヒナが誕生し無事巣立ちしています。

*1 環境調和型農業とは、減農薬・減化学肥料栽培など、特別栽培農産物から有機栽培による生産までを含めた農業で、資源循環型農業による有機質肥料を使った環境にやさしい土づくりの普及拡大や、栽培技術の確立と普及・促進を図り、環境に配慮した持続性の高い農業です。

【地域資源見直しのきっかけ】

ネットワーク会議での講演会で、『「だめだ」と思うところに道はありません。「ない！」と思って探すといいところはありません。「水や空気と思っているところに宝はある』と言われた言葉がとても衝撃的で、もう一度地域内を見直してみようと思いました。そして地域の廃校活用した旅のツアー「越前しらやま発　五感で感じる！ほたるの里の【ほたるカフェ】」を企画し、なんと「水の里の旅コンテスト２０１３」で最優秀賞を受賞する事ができました。

●ほたるカフェのチラシ

【地域と関係者の役割分担】

特に関係者は、「今度私たちがほたるカフェに出店するから来て」「しらやま地区で毎年６月の土曜日にこんなイベントやってるよ」と、ＳＮＳや身近な人に声かけし、ＰＲしてくれたことが集客力アップにつながり、知名度もアップしました。

地区内の人だけでやっていた時は、地区の人たちは当日のスタッフであってＰＲは関係ないないという感じでした。ＰＲが下手だから人が来なかった、といわれ担当者以外の協力はほとんどない状態でした。地域の課題を解決するには、地区内の人だけでなく、いろんな人を巻き込むことによってなお一層活発になるという事を「ほたるカフェ」で痛感しました。

地域＝会場提供や、地区内のホタル見学や見どころ案内
関係者＝ほたるカフェ出店者　会場内設営や広報

●白山さんちのこれから

【水源地域支援ネットワーク会議に参加して得られたもの】

旬の情報と会員同士のネットワーク

参加のきっかけは、平成 23 年度水源地域活性化リーダー養成研修会でした。会議終了後も、国土交通省の方々や講師の先生・会議参加者とも情報交換したり、いろいろアドバイス頂いたりして交流は続き、私たちの活動の原動力になっています。

毎年恒例の水源地域支援ネットワーク会議で得られるものは大きいです。地方開催で出会う各地の資源と人との出会い！環境が違い、取り組む内容も違いはずが、絶えず刺激をもらい今後の活動のヒントにつながります。そして会議で知り合った人たちとは、もう一度あの人に会いたいと思うような人たちばかりで、観光客の気持ちも知ることができます。東京会議では、講演会などで旬の情報を知り、他の団体の活動報告を聞き、参加者の何気ないひと言が私たちの背中を押したり、自信につながっています。いずれも、人と人のつながりは会議終了後も続き、心強い相談相手となって今後の活動の糧になっています。

【今後の展望・PR】

「福井ふるさと茶屋白山さんち」の営業開始！

今までは来訪者が、ゆったりくつろげる場所や公衆トイレ、観光案内所、地元特産品の購入ができる施設がないため、しらやまでの滞在時間も短く近隣の観光地へ流れていくことが多くありました。令和元年、空き家を改修し農家レストランや農産物販売所機能を兼ね備えた「福井ふるさと茶屋白山さんち」の営業をスタートすることができました。コウノトリもやってくる、魅力的な地域の良さを多くの人に知ってほしいです。しらやまブランドの安心安全な農林産物がいつでも販売でき、経済効果につなげていきたいです。また、住民が寄り合う場所とし愛される施設にしていきたいと、私たちは願っています。

活動事例⑥

●観光ガイドが案内する岩屋神社と権現岩

合同会社 東峰村（とうほうむら）ツーリズム協会
×
東峰村の観光情報サイト「東峰見聞録」の運営と観光案内

村の魅力を伝えるオーダーメイド観光の挑戦！

執筆者：合同会社東峰村ツーリズム協会
会長　小野　豊徳

観光情報の発信と観光ガイド

小石原川ダム建設に伴う水源地域活性化検討委員会から当初任意団体として活動を開始し、平成30年4月に合同会社東峰村ツーリズム協会として、観光事業と手仕事作品の製造販売を中心に事業を行っています。

東峰村ツーリズム協会が運営する東峰村の観光情報サイト「東峰見聞録」は、村からの金銭的支援を受けない完全独自採算運営で、小石原焼などの特産品や飲食店、まつりやイベント、観光スポットなど、観光情報に特化したホームページを運営しています。

また、旅行者の求めに応じた、村の魅力を伝える様々な観光案内を行っています。その内容は、小石原焼観光、百選めぐり観光、花めぐり観光、トレッキングやウォーキング、味めぐり観光、視察のご案内などです。

観光案内の中でも特に人気なのが、小石原焼窯元めぐり観光ガイドで、民芸の歴史や史跡を紹介しながら、小石原焼の窯元にご案内しています。

【活動内容】

東峰村の観光情報サイト「東峰見聞録」

東峰村の観光に特化した観光情報サイト「東峰見聞録」は、東峰村ツーリズム協会の生命線です。観光情報の発信は、知りたい情報を正確に、早く、分かりやすく伝えることが求められます。情報は、鮮度が命です。村に住んでいる村人こそが旬の情報を発信できるのです。

運営管理	東峰村ツーリズム協会
開設年月	平成 21 年3月
目的	東峰村の観光情報に特化したホームページで情報発信
掲載内容	① 小石原焼と高取焼、② 観光スポット、③ 体験スポット、④ お食事処、⑤ 特産品、⑥ まつり情報、⑦ 観光ガイド、⑧ 交通アクセス、⑨ 地図情報
ソフト	ホームページビルダー(常に最新版)
初期費用	トップページとサブページのデザイン設計を専門業者に依頼(10 万円)
掲載料	無料(紹介しているお店等は掲載料、更新料など一切頂いていません)
作成更新	会長が1人で管理(1人でないと管理上無理です)
更新頻度	2日に1度程度(新規ページ追加中)
貢献	観光を目的とした来村者への情報提供、掲載店などの集客と収益向上、特産品や作品の紹介PR、これからの観光の実践と提案
特記事項	① 観光案内人の依頼窓口機能、② 伝統的工芸品の魅力を伝える機能、③ アンケート調査機能、④ 動画の有効活用、⑤ 森づくり事業に活用、⑥ 問い合わせは専用携帯電話とメール、⑦ 天気と交通情報はリンク

●花めぐりガイド(シャクナゲ)

●岩めぐりトレッキングガイド(岩屋公園)

【活動地域の特徴】福岡県東峰村

水と緑の光る里　東峰村

東峰村は、福岡県中央部の東端に位置し、大分県日田市と県境を接しています。平成 17 年 3 月に合併により誕生した山村で、村の総面積 51.93k㎡のうち山林原野が約 86%を占め、村の人口は約 2,100 人です。東峰村小石原地区には、伝統的工芸品「小石原焼」の窯元が約 50 軒あり、陶器の里としての特色があります。また、東峰村宝珠山地区には日本棚田百選や美しい鉄道橋、平成の名水百選など、日本の原風景が残っています。

【水源地域支援ネットワーク会議に参加して得られたもの】

地域課題解決のためのヒントがある

私にとって水源地域支援ネットワーク会議に参加して得られたものは、毎年秋に開催される地方開催で、全国各地の水源地域での活動を直接現地で学ぶ機会ができたことが大変ためになりました。参加することで、自分自身の活動のヒントが得られたことは大きいです。

また、毎年冬に開催している東京開催では、水源地域の抱える課題をテーマにした研修内容もためになります。そして、新たな取組みとして水源地域の特産品販売及びPRができることは、ネットワーク会議に参加する理由になると考えています。

【今後の展望・PR】

役場を辞めて起業するという選択

2018年4月東峰村役場を早期退職して合同会社を設立しました。役場で長年仕事をしたからこそ見える観光で地域振興に取り組む村の課題がありました。

合同会社東峰村ツーリズム協会では、観光情報の発信と村の魅力を直接伝える観光ガイド（案内人）事業に取り組んでいます。また、新たな村の特産品として、木のカトラリーや木のアクセサリーのハンドメイド作品の製作と販売を新たな事業として取り組んでいます。

2019年度の会社経営は、全ての事業が順調で、合同会社設立から 2 年目で、初期投資を返還して黒字決算になりました。

これからも、地域課題に取り組みながら、東峰村の魅力を伝える会社として事業を行います。

□なぜ独自の観光情報サイトが必要なの？？

情報は①正確に ②早く ③分かりやすく そのためには、発信者に発信能力があることが一番良い方法です。公的機関のホームページは制約が多すぎます。情報は、鮮度が命です。住んでいる住民こそが旬の情報を知っています。

ホームページを作成する委託業者には、技術はあっても情報や人を結ぶネットワークはありません。情報こそが財産です。写真や動画、掲載内容全てが貴重な財産です。

□観光情報サイト作成に必要なものはある？？

① 発信する情報、② 求められる情報、③ サイトのイメージ、
④ 写真撮影と加工技術、⑤ 文章作成能力、⑥ 情報収集能力、
⑦ 人的ネットワーク、⑧ 根気、⑨ 向上心

□地域活動家になるためのポイントは？？

① 楽しみながら活動できる「あそび人」になろう
・・・楽しくなければ続かない！
② 失敗を恐れずチャレンジする人になろう
・・・3割当たれば大成功！
③「ないものねだり」から「あるもの磨き」を始めよう
・・・磨けば光る！
④ できることから「コツコツ」やろう
・・・階段は1段ずつ！
⑤ 成功例（失敗例）を「アレンジ」しよう
・・・真似して置き換えて考える！
⑥ 刺激を求めて旅に出よう
・・・出会いと発見の中にヒントがある！
⑦ 仕事を離れた活動の中にこそキラリと光る地域活動がある
・・・応援してくれる！

●左：窯元めぐりガイド（実演見学） ●中央：ムラ旅（竹棚田）●右：ムラ旅（行者杉）

活動事例⑦

執筆者：特定非営利活動法人ひろしまね
理事長　安藤　周治

●活動風景：フィールドワーク「春のうまいもん会」

特定非営利活動法人ひろしまね
×
ここで暮らしつづけたいの思いをつなぐ

持続可能な暮らしのために、地域の仕組みをつくる

「ひろしまね」には、前史がある

1960年代から始まる「過疎問題」。『お天気と農業は西から変わる』と言われるように、中山間地域の変化は、西日本中でも、中国山地はその典型でした。

急激な人口減少を目の当たりにして、小学校さえ廃校になるのではないか、と住み慣れた地域の崩壊を危惧しました。若者で、地域課題への対応や、解決策探り、具体の動きをしてゆこうと、70年に作木村（現広島県三次市作木町）で「作木未来会議」を、82年全国組織の「過疎を逆手にとる会」、「ひろしまね」の前身となる「江の川（ごうのかわ）流域会議」を86年に立ち上げました。

地域づくりに関わる産官学野から、お坊さんや大工さん、有機農業の担い手、県や市町村の公務員など40人ほどで活動をはじめました。流域市町村の地域資源調査や、地域活性化をテーマのシンポジウムなどを継続的に展開してきました。

定点観測のように流域の集落を歩くうち、年毎に集落のチカラの低下が見えはじめてきました。廃墟になるお寺、草ボウボウのお宮などが散見されました。「集落が危ない」いわゆる限界集落の出現でした。

「地域の活性化も重要だが、人の住まない地域の活性化などあり得ない。『ここに住み続けたいの思いをつなぐ』活動を起こす」と、集落の目的に平成16年特定非営利活動法人ひろしまねを発足させました。

【活動内容】

新しい地域の仕組み「もう一つの役場」構想の提案と実践

集落のチカラの低下をカバーするために、自治会組織はそのままに、小学校区範囲で、地域運営と地域経営を担う仕組みを新たにつくろうというものです。暮らしの質を高めるために、様々な知恵や技術、情報が集まる拠点であり、集落の人が動く仕組みです。具体の稼ぐ事業を起こすなど、流域の町で稼働しています。国も小さな拠点や集落ネットワーク圏として制度化しています。

集落は暮らしのベース。集落の維持継続は中山間地域の最大の課題です。現状の把握は事業実施の基礎の基礎だが、今地域を知る人がめっきり減りました。地域のご意見番や世話役的な旦那衆、篤農家がいなくなりました。市町村合併は網の目を随分粗くしました。それを補う地域調査は重要な活動です。悉皆(しっかい)調査を知らない公務員も多いです。むらの高齢者家庭、ひとり暮らしを対象に出かけます。1対象、2-3時間は当たり前です。その時間でやっと聞きにくい財布の中身や、家族や地域の人間関係が聞けます。

調査から生まれた事業もあります。総務省の集落支援員事業や地域おこし協力隊事業です。「補助金事業はもういい。手続きのできる補助人が欲しい」という古老の聞き取りから生まれました。

国民年金も減額が進んでいます。『年金に、もう1万円から2万円欲しい』とのつぶやきは多いです。8畳間2部屋続きという農家も多い中国山地。部屋を使うのは盆と正月だけ、農家民泊で1泊4，000円事業として、「新しい旅の提案」も実験を終えて好評でした。国の地方の元気再生事業で、「中国路銀河鉄・道の旅」の資源調査を完了し「ビジュアル江の川博物誌」をまとめました。インタープリターとしての高齢者の出番は大好評です。

●放棄された田畑や里山を守る『和牛の放牧で里山の風景を守る』社会実験

●地域の実態把握は『悉皆調査』から

【活動地域の概要】広島県、島根県・主に江の川流域9市町村

過疎の先進地は「業な川」の江の川だが、今は

江の川(ごうのかわ)流域は中国地方でも先鋭的に過疎化、少子高齢化が進んでいます。私の町も昭和 25 年には 7,000 人を数えたが、現在は 1400 人を割り、高齢化率も 50%を超えています。高速道に 30 分もあれば乗れる環境ながら、流域の町は、いずれも同じ状況にあります。平成 30 年春には流域に沿って、縫って走るJR三江線(さんこうせん)が廃止になりました。

かつて「業な川」とも聞いた、洪水の常習地域でした。築堤方式で水防災は不可能と、嵩上げ方式で集落を守る先鞭をつけた流域です。

地域で小銭が回るプチ・ビジネスが必要です。地域づくりの大きな柱として稼ぐ仕掛けが大事になってきました。

●上：「お出かけツアー」のサポート
●下：住民自治組織サポートシステム検討会

【今後の展望・PR】

ふるさと信託事業の提案

空き家は都市でも大きな課題ですが、田舎では更に深刻です。遺産相続の手続きがされていない林野や田んぼが多くあります。林野は図面では確認できても、現地での境界が定かでないことも多いです。更に二代まで遡って遺産手続きをするとなると、地球の裏側まで出かけないと印鑑がもらえないこともある時代です。

そこで、地域の有形無形の資源や資産を一括して管理する「ふるさと信託制度」を創設して、地域の資源として有効活用できないかと提案をしています。

活動事例⑧

執筆者：特定非営利活動法人ジャパン・フォレスト・フォーラム
理事長　植　克彦

●糸魚川ジオパーク

糸魚川ジオパークカレッジ
×
人と自然の関わり・自然力との共存共栄

糸魚川ジオパークカレッジとは

平成20年より、東京大学林学科OB・OGの有志団体東京大学庭師倶楽部は糸魚川市・東京糸魚川会の協力の基、糸魚川の大地・生態系・人文について人と自然の関わりや自然力との共存共栄を基に調査・研究・計画を進め、平成24年から市民を中心に糸魚川フィールドから地域の資源やポテンシャルを、誰でも参加して学べるコミュニティーのコアとして糸魚川ジオパークカレッジを開講させてもらい、今回8期を迎えます。きっかけは、糸魚川出身の社長から調査依頼を受けたことでした。

糸魚川ジオパークカレッジは、東京大学庭師倶楽部が主体です。協賛はNPO法人ジャパンフォレストフォーラムが事務局を務めています。協力として糸魚川市、糸魚川ジオパーク協議会、東京糸魚川会があります。

当カレッジでは、奴奈川学園*1のスタイルを受け継ぎつつ造園学による自然学を取り入れ、人資源の大切さを基に、どなたにもわかり易い形で座学、フィールドワーク、論文作成など一年間のカリキュラムを行います。

*1　奴奈川学園は、地元郷土史研究家　土田孝雄先生が始めた地元古来の神話から現地調査などを行い、縄文文化、糸魚川の文化や歴史、産業などを学ぶ一般市民を対象に行った学園です。

また、カレッジ卒業生により平成26年より付属研究室を立ち上げ、現在◆糸魚川ジオパークカレッジ付属アンテナショップcafe◆糸魚川ジオパークカレッジ付属farm◆ジオパークフォーラムin東大◆糸魚川ジオパークカレッジ付属研究室◆ジオパーク学会in糸魚川◆糸魚川ジオパークカレッジ付属works◆糸魚川ジオパークカレッジ付属演習林◆糸魚川ジオパークカレッジ付属ギムナジウム等を開催しています。

【活動地域の特徴】大地の公園と湧水群の旅

糸魚川ジオパークは、地質と自然や文化・歴史との関わりについて学べる大地の公園です。その一つ「月不見の池ジオサイト」は、巨大な地滑り地形や湧水群と、稲作や信仰、食文化、縄文遺跡などとの深い関わりについて、観光を通じて楽しく学べるところです。

□阿弥陀山と地滑り地形

頸城山塊の一つである阿弥陀山（1，511m）は、約300万年前の海底火山の噴出物によってできました。

その後、数十万年前にこの山が地滑りを起こし、その滑落崖が大滝となりました。また、地滑りの斜面には、高谷根や谷根、見滝付近に見られるように棚田が作られました。

●高谷根の棚田の風景

□細池湧水群と月不見の池

地滑り地形により棚田や湧水群が形成され、湧水池にはフサモやバイカモが見られます。地元では、最近まで、この湧水池の水を飲料水として利用していました。近くの酒蔵（猪又酒造）では、この水を利用して日本酒を醸造しています。また、この水はワサビ栽培にも利用されています。また、その水がたまってできたのが月不見の池です。

●上：細池湧水、下：月不見の池

□細池遺跡

細池湧水群の周辺では、縄文晩期の遺跡で、翡翠の加工や勾玉造りが行われていました。近くの畑からは、土器や翡翠の勾玉などが発掘されています。

●細池

●細池遺跡出土品

【活動地域の概要】新潟県糸魚川市 滝と湧水と水資源のくらし

新潟県最西端の糸魚川市はユネスコ世界ジオパークの街として約 43 キロの海岸と 3,000m 級の起伏を持つ数々の山と五つの谷から成り立っています。

菅沼部落[*1]はその山間部深くに位置して、室町の頃から人が住み、滝の前には水神様（高龍神）が祀られ春夏秋冬見事な姿で、塩の道は歴史ある道として、謙信、信玄像が並んでいます。

山間地なので田畑はもちろん木炭の生産で出荷し、野菜が豊富でナメコやしいたけの栽培、岩魚も取れ共同倉庫がありましたが、昭和期の終わりに静かにその役目を終えた後も廃校になった分校が残っており、毎年大勢人が訪れてくれます。

ジオパークのまち糸魚川市は水の町でもあり、地形の高低差を利用した水力発電が各所に設置されています。また、森林面積が糸魚川市の 87%を占めており、水質のPHが高く、米、作物、漁獲類の種類が豊富、山間部では温泉がありそれぞれの効果が異なる源泉があります。

このような水資源を活用した体験型観光と学習や研究題材として豊富な題材がある街です。

*1　菅沼集落の暮らしの唯一の収入源は木炭の生産でした。炭釜で作業をするには広い作業場が必要となるため、木炭専用の倉庫を建て、共同で使っていました。
　それも高度成長期と共に成り立たなくなり、廃村に至る前に畳んでしまいました。

□阿弥陀山信仰と日光寺の歴史探訪

日光寺は748年創立と伝えられる新義真言宗豊山派のお寺です。阿弥陀山を本山として信仰しており、阿弥陀山の山頂には、石仏阿弥陀如来・十一面観音が安置されています。また、お寺にはケヤキの一木造りの像が安置されています。像高84cm、頭部に見事な宝冠を頂き、平安初期の制作と推定され、県指定彫刻に認定されています。

●日光寺阿弥陀如来座像

□けんか祭りと優美な稚児の舞

日光寺では、春(毎年4月)になると、豊漁・豊作を祈る神輿の「けんか祭り」が行われます。また、優美な稚児の舞が奉納されます。

□肌がきれいになる良質な温泉

笹倉温泉は、活火山である焼山の麓にある温泉です。重曹が主成分の典型的な「美人の湯」です。肌の不要な角質を分解してくれるので、「ツルツル&美白」の肌をつくってくれます。糸魚川は山にも海にも近いため、山菜や海産物が豊富に採れます。地元で採れた新鮮な食材を活かしたおいしい料理が楽しめます。

●けんか祭り

●新鮮な料理

□湧水を利用したお酒やワサビ栽培と加工品

細池湧水を利用した酒、猪又酒造(株)の「月不見の池」や「奴奈姫」は糸魚川を代表するお酒です。また、湧水を利用して育てられたワサビは様々な加工品として販売されています。糸魚川産の翡翠も販売されています。

【今後の展望・PR】

懐古と癒しの里復活の記録

無くしてはならない我が国特有の歴史や文化の一片だと思います。

ささやかなボランティアでもいつか人が住めるような、そしてまた訪れてみたくなるような、そしてまた和らぐような、そんな空間にできたらと思っています。

多くの人達に不動滝だけでなく水源地の最初の一滴と、そこに共存する小さな、小さな集落として菅沼も分校も知ってもらい、心を和ませてもらいたいと思っています。

塩の道西回りで不動滝から菅沼峠を越え小滝のヒスイ峡、眺める景色は絶景だと思います。そして、地域の資源として有効活用できないかと提案をしています。

五つの谷の様々な水と文化

大地があり、生態系が生まれ、文化がはぐくまれることは、本来その土地ごとに特色があってしかるべきことと考えています。

しかし近年における大型観光地は類似傾向にあり残念に思えます。

そこで我々は五つの谷の水と人の文化について体験と学習し、そして自然資源について体験し、堪能していただき、「知的冒険の旅博物誌」を個々の参加者が作っていただけるツーリズムを目指しています。

「菅沼部落」とジオパークの繋がり

菅沼部落は山間部深くに位置しており、古道の「塩の道」の途中にある廃村です。隣には不動滝があり（ジオサイトの一部）、ニホンカモシカが生息しています。

菅沼は一見人里離れた不便な集落に思えますが、逆に昔は小滝、根知、青海に抜ける山道があり、塩の道としても賑わったため、里である今井部落よりも栄えていた時期があったそうです。

塩の道歩きでは、姫川～虫川～不動滝、そして菅沼峠を越えてアザキリ川を渡り小滝川と、いくつもの川を堪能することができ、温泉施設で宿泊できます。不動滝は、春は不浄祭、秋には滝まつり、キャンプもできます。川伝いに釣りも楽しめます。四季折々に景色も楽しめます。菅沼部落の、分校もあったという当時の原風景を残していきたいです。分校の校庭を、塩の道として、大勢の人達に歩いてほしいです。塩の道を西回りで不動滝から菅沼峠を越え、小滝のヒスイ峡を眺める景色は絶景です。

今後の展望と課題

今後は、各ジオサイトにおける地質と自然や文化・歴史との関わりについて、一つの大きな物語として整理し、初めて訪れた方にも分かりやすく説明できるように工夫をしていきたいです。そして、多くの方から各ジオサイトを楽しんでもらうことにより、糸魚川の地域振興につなげていきたいと思います。

平成 20 年
糸魚川出身の社長から糸魚川を元気にしたいと東京大学庭師倶楽部に調査依頼があり、同年から 1 年かけた調査が始まる。

平成 21 年
調査報告書を作成、（2000 ページ）糸魚川市長に提出した。糸魚川ジオパークがこの年、世界ジオパークに認定された。

平成 22 年
ジオパークについて広く市民に周知する方法を依頼。市民大学風のカレッジ提案を行い具体的に進める。

平成 23 年
東日本大震災の調査

平成 24 年
糸魚川ジオパークカレッジ開校、以後 2020 年第 9 期生が入校し、現在に至る。

平成 27 年
大地の公園における地形や地質の影響による生態系と食文化の体験学習と研究を始める。

平成 28 年
新たな林業として体験型の森林アドベンチャーとしての可能性について、糸魚川ジオパークカレッジで実践的研究計画を開始。

平成 29 年
首都圏の NPO 団体の紹介により、地域の水資源や、水の故郷について、大地と水と文化の関係について活用事例の開発を始める。

平成 30 年
新潟県糸魚川市内に首都圏の子供たちを対象に森林教育ツーリズムを 2 泊 3 日で行った。

令和元年
水資源ツーリズムの計画案を進めている。

有識者による対談

～水源地域の魅力・役割、今後の水源地域支援ネットワークの在り方～

司会　本日は、水源地域支援ネットワークの今までの振り返りや水源地域支援ネットワークがもたらした役割や成果及び今後の水源地域振興の展望について、水源地域支援ネットワークに初期から関わっていただいている安藤先生と上田先生に対談していただいて、各地域でより良い水源地域振興の取組みを展開する一助としていきたいと考えております。

①　水源地域の魅力、水源地域への想い

まずは、お二人が長い間ネットワーク会議に関わり続けていただいていることについて、この会議の魅力や、水源地域への想いがあれば教えてください。

安藤　水源地域の生活、産業などの状況は、「水の里応援プロジェクト」立ち上げの頃よりも更に厳しさが増しているように思います。しかしながら、水源地域の重要性や維持や保全の必要性は、増しているのではないかと思っています。

総務省の過疎問題懇談会の委員もしてきましたが、水源地域と同様な課題を抱える過疎地域について、どのよう地域づくりをしてゆくべきなのかを、探り、実践していくのが私のライフワークです。水源地域の現場に立つことは、地域の皆さんの様々な試みがあり、知見を増すことができます。そして、これまでの経験や体験をもとに、水源地のより良い地域づくりのためのお手伝いをしたいと考えています。

上田　私は景観や風景を自分の専門分野にしていることもあり、その視点で今まで水源地域支援ネットワーク会議に参加してきました。特に風景やふるさとといった研究のテーマにおいて、ダムの事例は、ある意味ふるさとが失われ、ふるさとの風景が一変した特殊な事例と言えます。その中で、ふるさとを失った人やふるさとの風景が一変した人たちが、自分のふるさとを作り直す、または引き継いでいくために強い思いや信念を持って関わり続けている様子に直に接することができたのは、自分にとっても学びが多かったです。ふるさとを語る上で、このような人たちの話を聞くことは非常に大切だと思ったことが、参加を続けていける一つの理由です。

②　特に印象に残っているエピソード

司会　これまでに行ったネットワーク会議の中で、特に印象に残っているエピソードはありますか。

安藤　平成29年度に滋賀県高島市で開催されたネットワーク会議が一番印象に残っています。その会議では様々な団体から、多彩な事例が紹介されました。集まった団体は高島市周辺の方々だけでしたが、琵琶湖に関わる市民活動の豊かさ、奥の深さに強く感銘を受けました。

上田　個人的に印象に残っているネットワーク会議は、平成28年度に訪れた岩手県奥州市です。なぜかと言うと、受入れ団体の（一社）いわて流域ネットワーキングの代表理事が、地元の人たちにこの会議に参加して、他の地域からの参加者と直接話を交わしてもらいたいと、ホストとして地元に対して強く働きかけていたからです。地元で開催される本会議を、十二分に地域のために活用するにはどうするべきかを真剣に考えていたと思いました。地元のどのような人たちを呼び、その人たちにどんな話を聞いてもらいたいか、この場を地元のプラスに変えるいい機会にしようとする気持ちがとても伝わってきました。そこから逆に、こうした活動に関わっていく覚悟がこちら側にも問われているように思いました。

安藤　そうですね、市民活動のリーダーも、市民活動も常に覚悟が有るのか無いのかが問われます。私たちは、地域の人たちに絶えず厳しい目で見られ、評価されているわけです。その期待にどのように答えるのか、真剣勝負をしないと答えられないところがあります。

③ 水源地域ネットワーク会議の役割や効果

司会　このネットワーク会議は、現地開催と東京開催の年2回開催されます。まずは、現地開催についての役割や効果などについて聞かせてください。現地での開催を行うことによって、水源地域で活動している方々に対して、どのような影響や効果を与えたのか。逆に、今まで全国から参加した水源地域の人たちに対して、どのような波及効果があったのでしょうか。

上田　現地開催はある意味、皆さんの普段から努力している活動が、我々のような外部の視点から評価される機会だと思います。同じように全国の水源地域で活動している人たちがやって来て、私たちはこんな活動をしています、この地域の活動はこういう点がいいですねという話をすることは、地元の人が自信を持つきっかけになるのではないかと思っています。自分たちの取組みが間違っていなかったと確信することや、同じような水源地域の中での位置付けが分かる場ではないかと思います。

安藤　自分の活動地域が全国に認知されることは、開催地域の住民にはとても喜んでもらえると思います。特に、先ほどの高島市での会議では、自分の夢について語ってもらった意見交換会が良かったと思います。

この意見交換会で自分の夢を語ったことからサポーターグループができ、実現に向かっていると聞いています。

地域に対するアドバイザーの役割は我々だけでなく、全国からの会議の参加者であり、情報交流をする中で、お互いに切磋琢磨するようにステップアップへの発想が広がったり、高まったりしていると思います。そのような意味で、現地開催における情報交流の良さがあります。しかも、それは他からの受け売りではなく皆さんの実体験とした情報やアイデアの提供なので、情報を受けとる側も腑に落ちやすく、効果は非常に大きいと思います。

司会　つづいて東京開催の役割や効果についてどのように考えていますか。

安藤　できるだけ新しい情報を提供出来たらと考えています。平成30年度の東京開催で取り上げられたSDGsなどは最たるものです。企業も含め国や地方公共団体の大きな方針にもなってきているSDGsついては、会議に参加した皆さんが情報を持ち帰り、自分たちの活動がSDGsにどう位置付けられるか考えているようです。このように、時代の流れに乗った情報提供は常に必要だと思っています。それから、地方では文字媒体でしか触れることの難しい情報について、東京開催では当事者の方から、講演等で生の情報として聞けることは素晴らしいことと思います。

司会　過去のネットワーク会議での具体的な提案から事業につながった例はありますか。

上田　良かった例は、福井県しらやま地区の例です。平成25年の会議後に交流会を行なった、地元食材を紹介するレストランでは、月ごとにいろいろな地域の料理を提供しています。そこで、「しらやま地区も、ぜひやります」と宣言し、実際に食材提供に取り組むことで課題が見つかり、PDCAのように実行・検証・失敗・再挑戦というプロセスを皆で見届けながら先に進んでいきました。単に過去の成功や失敗事例を聞くだけではなく、そのプロセスを皆で応援しながら、経験できたことも良いことでした。

平成30年度は、以前から中心メンバーで開催を望んでいた特産品の販売を国土交通省の玄関ホールで行いました。実際に開催してみたからこそ分かることが多いので、こちらが用意したプログラムだけではなく、参加者の希望する内容を試してみて、PDCAサイクルを皆で共有していく中で、次につながるテーマになっていくこともあります。

④ 水源地域を振興することの重要性

司会　なぜ、水源地域を振興することが大切だと考えますか。

先生方にとって、水源地域振興の重要性の肝はどこにあると考えていますか。

安藤―一番の肝は、水の重要性を再認識することだと思います。水の再利用を含め、どのように水循環をつくり出していくのか、丁寧に議論をしながら施策の中で考えてもらうことは、制度の中でも住民側もどのようにフォローアップしていけるか、あるいは自分のこととして取り組んでいけるのかを確認することであり、それを考える場としての役割を担ってゆくのも、ネットワーク会議の役目ではないかと思います。

そのためには当然、中下流にも関係してゆきます。上流からの発信で中・下流域の皆さんとのネットワークがどう組めるのかが、ポイントになってくると考えています。今の都市中心の暮らしはあるが、このまま将来にわたって可能かというと必ずしもそうではなく、自然と共に生きる、とりわけ、日本の国土や風土の中で、どのような暮らしをしていくのか、お互い議論をしていかなければなりません。そのきっかけを我々が提言していくことも、これからの大きなもう一つの役目ではないかと思います。そのような意味で、今の仕組みを、裾野を広げていくことと合わせて、質の高い議論も必要だと思います。それぞれの時代に合った水源地域との向かい合い方は改めて議論してもいいテーマではないでしょうか。長野県木祖村の取組みは、基本的なことで上下流の関係づくりとしては非常に大事な仕事だと思っています。

もう一つ言えば、「農作業体験プログラム」のような事業が必要ではないかと思います。小学校5年生ぐらいの児童が1ヶ月とは言わずとも1週間から2週間ほど、水源地域を含めた農山漁村で体験するようなプログラムがあると、もっと状況は変わるのではないかと思っています。何も知らずに蛇口をひねれば水が出るということで終わってしまうのでは、バックヤード（水循環や水の重要性）をイメージもしていないということではないでしょうか。SDGsのプログラムの一環として、子どもたちに体験をさせることを、特別な形でも事業化した方が良かったのではないかと思います。

上田―水がインフラの「機能」として認識されてしまっているときに、それをもう一度「場所」と結びつけ、目で見て分かる「景観」として認識できる状況に持っていくことが大切だと思います。水道水として飲めるという「機能」から健全な水循環を理解するのではなく、水源地域という「場所」の、目で見て分かる「景観」の美しさとして保全していくことが、人々の認識を変えるために重要であると思います。

これまでの長い歴史の中で、人の営みと自然との相互作用で出来上がっている地域の景観は、文化的景観という文化財のカテゴリーで守られています。私たちが水をどのように使ってきたかが目に見える形で現れている文化的景観として、水源地域を保全することも大事なことだと思います。「機能」にするとあらゆる関係性が見えなくなってしまうので、全体のシステムが見て分かる場所を取っておくという意味で、水源地域を保全することは、先ほどの教育の話に結び付きます。教育には分かりやすい教材・素材が必要で、それは「機能」でいくら説明しても分かりづらいので、それが実感として伝わる「場所」という意味で、水源地域は最高の教育の場所になり、皆の認識を変えることができると思います。

⑤ 今後の水源地域の役割について

司会―今後、水源地域はどのような役割を果たしていくべきでしょうか。また、どのような地域になって欲しいとか期待などはありますか。

上田―水源地域に住んでいることが最高のステータスになるような場所になってくるといいと思います。これは、今までの別荘地と

いう意味ではなく、通信技術などいろいろなテクノロジーの変化で、そのような場所で生活できることが本当の贅沢になるという意味です。

今だと、田舎に行くと仕事がないなどの条件不利が挙げられがちです。しかし、それらが解消された際には、水源地域は、人工的な都市に住む人たちが憧れる、理想の居住地になるかもしれません。

安藤　今、過疎問題もそうですが、都市部と過疎地域（水源地域）を色分けして見なくてもいい時代が少しずつ来ているのではないかと思っています。水源地域が特別ということではない時代が少しずつ来ているのではないでしょうか。

皆さんの価値観が変化しているのも確かです。不便な所でも暮らしは豊かだという生き方のような、田園での暮らしの価値、豊かさが一般化してきていると感じています。多様な暮らし方を目指していく時代が間もなく来るのであれば、もう少し幅広い情報提供の方法が作戦として必要なのではないかと思います。どこでどのような人たちが、どういった暮らし方をしているのか、まだ情報としては不足しているのでは無いでしょうか。

今の水源地域は人口も少なく居住するのは大変だが、どのように守っていけるか、あるいは守るというよりも伝えていけるかどうか、これまでの文化や歴史の大事さをどのように残していけるかの視点も、先々を考えると非常に重要だと思っています。その視点から水源地域の在り方ももう少しゆとりを持った、時間を長く見た形での対応策や維持の方法もあっていいのではないかと思っています。多様な価値観を持った人たちが暮らす時代が、間もなく具体的に来るのではないかという気がしています。

上田　ふるさと回帰の時流がある中で、水源地域はダムによって破壊されたふるさとなのではないかという話をしました。しかし言い方を変えれば、いわゆる村社会が残ったのではなく、新たに作り変えられたハイブリッドなふるさとだからこそ、寛容なふるさととして、水源地域はこれからの新たなふるさとをつくっていけるポテンシャルを持っているかもしれないと本日の話を聞きながら思いました。

司会　今の田舎暮らしについては情報誌やウェブサイトがあり、自治体から空き家を紹介するようなマッチングのサイトもあります。いかにニーズのあるところの掘り起こしができるか、マッチングをしていくかという工夫、アイデアのようなものがあれば教えてください。既に取り組みたい人は始めていますが、興味のない人はいくらプッシュ型で情報が送られてきてもそれに惹かれないように、本当に価値観がバラバラで、どうすれば上手くニーズを捕えられるのかアイデアがありましたら教えてください。

上田　ライフスタイルとしての居住地の選択となると「機能」という話になってくるかもしれません。しかし、そうではないもの、例えば福島の原発事故の時は皆さんが最初に「自分のライフスタイルとマッチングするからあそこに行こう」ではなかったはずです。もっと本能的な、生き物として生きるためにどこかに行かなければという選択で場所を選んで移り、その後にそこでいかにして新しい生活を築いていくかという順番だったと思います。

水源地域は、自分のライフスタイルの中でマッチングできるところとして選んでもらうよりは、健康や自分の幸せを考えたときに選ばれる場所であった方が良いと思います。綺麗な環境で生きるために自分のライフスタイルを合わせていける人の方が水

源地域のことがきちんと伝わるのではないかと思います。ですから、田舎暮らしの雑誌の延長線にはないと感じています。今の生活や価値観の延長でどのようにマッチングさせるかとは違う、別の価値観、別の評価軸が必要だと思います。

安藤　その候補地として水源地域の可能性は、大いにあると思います。そういう所に住みたいと思う人が、どのような分野の方々なのか、一般的な方々なのかは、これから調査をしなければいけません。そのぐらいまで国が応援できると、水源地域対策特別措置法の隅に書かれている地域振興に移住という視点の情報提供などを具体的にして、施策として展開する市町村もあらわれるのではないでしょうか。移住は仕事場が有るか無いかだけではない評価で、ひとが動き始めてきていることは確かです。

⑥ 今後の水源地域支援ネットワークの在り方

司会　このネットワーク会議は今後の水源地域振興にとって、どのような役割を果たしていくべきでしょうか。あるいは会議自体を今後、どのように盛り上げていくか、特に今後はどのような方々に参加してもらいたいかを中心に、今後の会議の在り方について聞かせてください。

上田　他の省庁との横のつながりがあると、水資源のテーマだけでは解決できない課題を、横串に刺しながら解決できることがきっとあります。ネットワーク会議に他の省庁の人が話をしに来てくれて、水源地域の人たちがそれを聞いて自分たちの課題を違う角度から考えるというだけでも違ってきますよ。

安藤　水源地域と言えばダム・河川と思われますが、そうは言っても上流部では治山も関係しています。平成29年度東京開催で林野庁は山の保水力をテーマとして講演を行いました。東京開催では水源地に関わる他省庁の話を聞くために、招へいが可能です。情報を享受する範囲を広げて、水源地を考えるという捉え方は大事なことだと思います。

上田　上流の人だけではなく、同じ川の水を飲んでいる上流下流の人たちがタッグになって一緒のチームとして参加できるようになると、また違う展開があるのかと思います。

安藤　願わくは、これ以上、国の施策でも水源地域が押し込まれないようにと思います。河川の一部であることは当然のことですが、水源地域としてのメッセージがしっかり出せるような事業を考え、本ネットワークからの意見を反映していくことも大事なことです。

司会　安藤様、上田様、長時間に渡りありがとうございました。語り足りなところもあるかと存じますが、以上で終了とさせていただきます。

プロフィール

西口 学 氏

平成 3 年京都大学大学院工学研究科修了。同年国土庁（現国土交通省）入庁。
水管理・国土保全局水政課水利調整室長、長野県警察本部警務部長、中部地方整備局建政部長などを経て令和元年7月より国土交通省水管理・国土保全局水資源部水資源政策課長。

安藤 周治 氏

NPO 法人ひろしまね理事長。小規模で超高齢化の集落や高齢者の暮らしの支援には、個別対応が可能な役場に代わる民間組織の「もう一つの役場」が有効であると、広島県と島根県境地域で実証中。長年、過疎地域を元気にする取組みや NPO など市民協働による地域づくりを実践的に取り組むとともに、アドバイザーとして全国の地域を巡る。主に国土庁地方振興アドバイザー、国土庁水源地域対策アドバイザー、総務省過疎問題懇談会委員、コミュニティ政策学会理事、国土交通省主催水の里の旅コンテスト審査委員長などを歴任。
主な著書に「全国まちづくり集覧」有斐閣）、「まちが輝く」（第一法規出版）など
水源地域支援ネットワークへは創設当初から参加。

上田 裕文 氏

平成 13 年東京大学農学部森林環境科学専修卒業後、平成 15 年東京大学大学院農学生命科学研究科森林科学専攻修了。ドイツ学術交流会（DAAD）奨学生としてカッセル大学建築・都市計画・景観計画学部、都市・地域社会学科にて Dr. rer. pol.（経済社会科学博士）を取得。平成 21 年札幌市立大学デザイン学部を経て平成 28 年より北海道大学観光学高等研究センター准教授。専門は風景計画。森林資源を活用した地域振興の取組として、健康保養地や樹木葬墓地についてドイツとの比較研究を行う傍ら、国内外で景観まちづくりや交流人口や関係人口を視野に入れた観光まちづくりのプロジェクトに取り組んでいる。主な著書に、『The Image of the Forest』（Sudwestdeutsche Verlag fur Hochschulschriften）、『こんな樹木葬で眠りたい』（旬報社）など。水源地域支援ネットワークへは平成 24 年より参加。

※プロフィールは対談収録時点（令和2年2月26日）のものです。

水源地域活性化のヒント ―水源地域支援ネットワークのこれまでの取組と、地域の取組事例集―
2021 年 2 月

発行：国土交通省　水管理・国土保全局　水資源部　水資源政策課
TEL　03-5253-8392
E-mail　hqt-suigenchiiki.shinko@gxb.mlit.go.jp

本書の内容はウェブサイトでもご覧いただけます。
https://www.mlit.go.jp/mizukokudo/mizsei/mizukokudo_mizsei_tk3_000040.html

本書や水源地域活性化の取組について、ご意見をお寄せください。

写真

表紙：「さくらおろち湖」島根県雲南市
提供：NPO 法人さくらおろち